
漆黒の旅人

Rukena

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の旅人

【Nコード】

N4819J

【作者名】

Rukena

【あらすじ】

ある日漆黒の旅人は魔獣に襲われていた町についた。町の様子は悲惨としか言いようのない状況。魔獣達は殺戮の限りを侵してこの町を後にしたのか一匹も見当たらない。町の人達は魔獣に対抗したのだろう、死んでいる魔獣も町の中にいた。旅人は町を歩き一人の生存者を発見した。少女は瓦礫の間でひどく怯え、震えながら縮こまっている。

旅人はその姿を見て言った。「一緒に来るか。」少女は酷く驚いた様子で震えながらこくと頷いた。それから漆黒の旅人と少女の当

てのない旅は始まった。

はじまり

「ふー…今日はここら辺で休むか。明日くらいには村につくだろうし。」

一人呟くとその青年はカバンから保存してある干し肉とパンを取り出し食べ始めた。青年は遠くに見える村を見据え明日の事を考え早めに寝とくかと心のなかで思い、食事を済ました後横になり夢の中におちていった。

「ん…」

青年は遠くからの雑音で目が覚めた。あたりはまだ薄暗く、村とも離れているため音なんて届かないはずなのに…

青年は寝ぼけ眼で雑音のする方角に目を向けた。そこには真っ赤に燃え上がっている部分があり青年が明日いくはずの村だった。

青年はカバンと得物である漆黒の大剣を持ち村へ走った。

青年がその村に到着した時には村は壊滅状態であった。そこには村に住んでいたであろう人々の亡骸や魔物の屍が散乱していた。青年は生き残っている人いないか捜すべく町を歩いた。だが人の気配は全くなく、辺りは静まり返っていた。

青年が諦めかけていたとき微かにすすり泣く声が聞こえた。青年は声のする方角へ歩んで行った。

そこには小さく縮こまっている少女がいた。着ている服はボロボロで足からは血が出ていて真っ赤に染まっていた。

「大丈夫か？」青年は静かに語りかけるように言った。

少女はゆっくりと顔をあげ青年を見上げた。

「何があつたんだ？」

「…い、いきなり魔獣が村に現れて…村の人を」少女は全てを言い終わる前に泣き始めてしまった。

青年は少女に駆け寄り小さな体を抱きしめた。少女は青年の胸の中で溜め込んだものを出すかのように泣き続けた。

少し経つと少女は力を手放したかのように寝てしまった。魔獣が現れてきた時から気を張っていたのだろう。青年は少女をゆっくりと寝かせ、足の治療を行い、それが終わると自らの漆黒の外套をかけた。

それからしばらくして青年は落ちていた農具で穴を掘り、亡骸となった人々を一人一人埋葬していった。終わるころにはすっかり日も落ち、辺りは暗くなっていた。

青年はそこら辺にある木材を集めて火をつけた。少女は先ほどから酷くうなされていた。青年は少女の手をそつと握り、自らも横になった。しばらくすると悪夢が去ったのか少女はすーすーと規則正しい寝息をたてていた。青年はそれを確認してから夢の中におちていった。

時間は過ぎていき朝になった。

「ん…。」

青年は日の光で眩しそうにしながら目を開けた。隣を見ると昨日の少女がいなくなっていた事に気付いた。青年は少女を捜すため辺りを見回すと、住人を埋葬した場所で手をあわせていた。

少しすると祈り終わったのか静かに目を開け、青年の方に向きゆつくりと歩いてきた。

「昨日はありがとう…。」

そう言って青年の横に座った。

「墓も作ってくれたんだね…。」

「まあな。」

「ありがとう。」

「もういいって気にすんな。」

青年は少女の紅い髪をくしゃくしゃと撫でた。

少女は青年のされるまま撫でられていた。そして少しだけ笑った。

「なあ名前なんていうんだ？」

「フィオ。お兄さんはなんて言うの？」

「フィオか、いい名前だな。俺はレン、よろしくな。」

「レンさんだね…うん、覚えた。」

「呼び捨てでかまわないぞ。後、敬語もなしだ。」

「わかりま、分かった。」

「まあ無理にとは言わないし勝手にしてくれ。そこでこれからが本題だ。」レンは一呼吸おいてフィオに告げた。「これからどうする？」

フィオは少し泣きそうな顔で村をみた。

レンはフィオに優しく語りかけるように言った。「一緒にくるか？」

フィオは一瞬驚いた顔でレンを見上げた。そこには優しい笑顔で少女を見ているレンの顔。そしてフィオは驚いた表情から一転、すこし目に涙を浮かべながらコクンとうなづいた。

「よし、そしたらフィオのボロボロ服をどうにかしなきゃな。足の怪我は平気か？」

「うん。レンが手当てしてくれたから。」そういつてにっこりと微笑んだ。

「でも服なんてないし…隣の街まで俺の外套着ときな。」

「でもレンが…いいの？」心配そうな顔でレンを見上げる。

「大丈夫だ、心配すんな。」と笑いながら言った。それからレンは軽装のまま背に漆黒の大剣を背負い、カバンを持ち上げた。

「じゃあ行きますか。」レンは次の町にむけて歩き始める。

そしてフィオもその後ろについていった。

隣街へ

（あの村から結構歩いたな。）

レンはカバンから地図を取り出して現在地を大まかに把握していた。

「ふー半分くらいまではきたかな…。フィオは大丈夫か？」

「うん、まだ大丈夫だよ。」その声にはあまり力が入っていない。

「…嘘つくな。さっきから声に力がないぞ。少し休憩するか。」

「レン、ごめんね。」

「謝んなくていいつつの。」レンは苦笑しながら言った。そしてカバンから水を取り出しフィオに渡した。フィオはレンから水を受け取りおずおずと飲みだした。

レンとフィオが目指している街、リンバルは農業が盛んな土地で自然が多く比較的穏やかな街である。だがこのところフィオのいた村のように魔物が多くなってきたため、どのような状況になっているかレンにも分からず、自分達もいつ魔物に襲われてもおかしくない状態であった。レンとしては早めに街まで行きたい所だったが、レンはフィオの事を気づかいゆっくり歩いてきた。

「よし、あと少しだ…フィオいけるか？」

「ちょっと休んだし大丈夫。」そう言って立ち上がった。

二人はゆっくりと道を歩いてく。

「なあフィオ、フィオの事聞いてもいいか。」突然レンがフィオに言った。

「いきなりどうしたの？」レンからの突然の会話にびっくりしたのか、隣に歩いてるレンを見上げたながら聞く。

「いやフィオがあゝの村でどんな事をしていたのかなーって。」レンはフィオを見つめ返し微笑んだ。

「私はあそこの教会で育ったの。」フィオはぼつぼつとしゃべり出した。

「私が子供の頃、あそこの教会のシスターに拾われたの。それからシスターが私の面倒を見てくれて…って言っても覚えてないんだ。シスターに教えてもらったんだ。でもでも、最近は私も教会の手伝いとかしてたよ。レンは？」

「俺は…まあ自分探しの旅ってとこだな。」

「自分探し？」フィオは首を傾け聞いてきた。

「ちょっと前までは傭兵やってたんだがな、その前の記憶がないんだわ。だからその前はなにをやってて、どこに住んだのか知りたくてな。自由気ままに旅人やってるわけよ。」

「そうなんだ…。」とフィオは小さく呟いた。

フィオも子供の頃にシスターに拾われる前の記憶がなかった。村での生活が自分の全てで、シスターがほんとの親なんじゃないかと思うほど自分に愛情を注いでくれたし、村の人たちは家族のように接してくれた。だからフィオとしても無理して記憶を思い出そうとはしなかった。さっきレンが記憶喪失の事を話してくれるまで、自分も記憶喪失だったんだ、と思い出すほどだ。フィオはレンと同じ境遇だったことに驚きつつ、同時に運命的な何かを感じていた。また自分を助けてくれたレンの力になれるよう頑張ろうと心の中で誓うのであった。

それからレンとフィオは互いの話をしながらリンバルへ歩いてた。

「ん…あれは馬車だな。なんかあったのか？」遠くに見える馬車はなぜか止まっていた。二人は近づくにつれはつきりと原因が分かった。…魔物だ。

「フィオ、ちょい急ぐぞ。」レンは静かにフィオに言う。

「きゃあ！」フィオはいきなりレンにお姫様だっこをされて驚く。だがすぐにレンの胸元を強く握り締めた。レンは全速力で駆け抜けた。

近くに行くと兵士が魔物相手に苦戦していた。魔物は5体、鋭い嘴に目が4つある鳥型の魔物、2メートルはあるであろうごつい体格と手には木製のハンマーを持っている魔物、そのモンスターの子

分なのか少し小さい魔物が3体。戦っているのは4体だけで鳥型は戦況を見ていた。レンは魔物が戦況を見ていることに驚いたが、幸い怪我人はいるものの死んでいる人がいないことに安堵した。

「フィオここでちょいまつてな。」レンはそう言つて、フィオの赤髪を撫でた。そして背負っている漆黒の大剣を抜き魔物に突っ込んでいった。

「邪魔だ！どけ！」レンは叫んだ。兵士は一瞬レンの方に向き、魔物から離れた。レンは手前にいた小さい魔物を横になぎ払い兵士の前に立つ。なぎ払われた魔物は5メートルくらい吹っ飛び、そのまま動かなくなった。そして近くにいた兵士に「早めに怪我人の手当てをしろ、手の空いてるやつは小さいやつを集中して叩け。でかいのは俺がやる。」といい魔物に向かい走る。魔物は向かってきたレンに対しハンマーを振り下ろす。レンは避けずに大剣を振り上げた。そして「ドゴンツッ！！！」という衝撃音が響いた。

フィオは森に身を隠しながらレンを見ていた。最初に小さい魔物を片手で持った大剣でなぎ払ったときは啞然とした。他の魔物より小さいと言つても160センチくらいはある。レンは180センチくらいはあるが痩せていて、片手で大剣を持つのに驚いたのに、なおかつ魔物を5メートルも吹き飛ばしたのだ。そして近くの兵士に少し話すと、迷わずでかい魔物に走つていった。魔物は当然レンを狙い、手に持っている馬鹿でかいハンマーを振り下ろした。レン

はハンマーが当たる直前に手に持っている大剣を振り上げていた。フィオは反射的に目をぎゅっと瞑った。恐る恐る目を開けるとレンと魔物が互いの武器に力を込めて押し合っているのが見えた。フィオはレンから貸して貰っている外套を知らず知らずに握り締めていた。

「終わらすか…」レンは呟く。次の瞬間一気に力を入れ魔物のハンマーを弾き飛ばす。そして…魔物を両断した。魔物は声をあげる間も無く散った。

「あとは鳥だな、その兵士！剣を貸せ。」兵士は恐る恐るレンに剣を貸す。鳥型の魔物はでかい魔物が死んだのを見届けると、逃げるように飛び立った。「逃がすかよ！」レンは兵士の剣を魔物に思い切り投げた。その剣は凄まじい勢いで魔物の胴体に突き刺さり、魔物は落ちていった。「かたずいたな。」抑揚のない声でレンは言った。いつの間にか他の魔物も兵士達が片付け、残りの兵士は怪我人の手当てをしていた。

「旅のお方、礼を言います。」兵士はいきなり現れ、助けてもらったレンに言う。「別にたいしたことではない。フィオ！もう来ていいぞ！」兵士にそう言うフィオがいるであろう森に向かって叫んだ。フィオもそれが聞こえたのか、小走りでレンに向かって走ってきた。フィオはそのままレンに抱きつき「レンすっすっごい強いんだね！びっくりした！」と興奮気味に言う。レンは「傭兵してたからな。」と苦笑しながら言った。

辺りに魔物がいなくなったのを感じたのか、一人の女性とそれに付き添っているメイドが出てきた。そしてレンを見るなり二人は一瞬固まった。そして次に叫んだ。「レン！！？」「レン様！！？」

姫とメイド

「それで説明してくれるんでしょうね！」

「逃がしませんよ！」

レンは馬車の中で追い詰められていた。

あの後レンとフィオは馬車から出てきた姫とメイドによって無理やり馬車の中に入れられ、レンは二人に質問攻めにあっていた。

「まあ落ち着けっつて。」

「落ち着けません！！！！」

「ははは……」

レンは必死に二人を落ち着けようとしてるが全く効果はない、むしろ悪化してるといつてもよい。その様子をみてフィオは苦笑いを浮かべている。しばらくレンの説得は続いていた。

そして説得の結果、レンはもちろん負けた。

「…分かった、悪かったよ勝手にでてって。ちゃんと話すから。」

「「ちゃんと話してくださいね！」」

二人はレンを睨みながら言う。

「とりあえず自己紹介から始めようぜ。」

「…分かりました。王都クレメンツの一女、シャル＝クレメンツです。よろしくね、フィオちゃん。」

「私はシャル様のメイドをしております、クルルと申します。以後お見知りおき下さい。」

「わ、私はフィオと言います。よろしく願います。」

シャルは少し砕けた感じに挨拶をし、クルルは丁寧に挨拶した後、軽く礼をした。それをみたフィオはかなり緊張してるのか早口で挨拶した。

「さて、挨拶も終わったことだし…」「レンの話ですよー!!」「…そうだな。」

レンが逃げようとしてる事がバレていたらしく、二人はにっこりと笑いながら黒いオーラを放っている。

「俺がクレメンツを出た理由は二つだ。まず一つはセフィとフィオには言ったんだが、自分の過去を知りたいと思ってな。シャルもクルルも俺が記憶喪失なのは知ってた。クレメンツで傭兵やらせてもらったから金も溜まったしな。もう一つはクレメンツの力が

届いていない所を見てみようかな」と。王都付近は治安もいいんだけど、少し離れると結構魔物とか盗賊とかでるしな。部隊にいとかなかなか自由に動けないだろ。クレメンツはもともと俺がいなくても平和だったしな。これがその理由。」

「理由は分かりました。ですがなぜ私達に話してくれなかったんですか？」

「あんま湿っぽいのは柄じゃないんでな。セフィにはちゃんと手紙置いていったろ。」

「…皆さんあなたの帰りを待ってますよ。ここにいるクルルだって。」

レンはクルルを見た。クルルは今にも泣きそうな顔でレンを見つめていた。

「ごめんなクルル、必ず戻るから。心配すんな。」

「レン様…。」

クルルはレン達に聞こえないような小さな声で待ってますと呟いた。

そうこうしてるうちにリンバルへ着いた。シャル達はクレメンツ

に向かうためリンバルで別れた。そのときに、シャルがレンも一緒に
につれて帰ると散々駄々をこねたが、リンバルでの用が済んだらク
レメンツに向かうというのを約束をして一足先にクレメンツに向か
わせたのだ。その約束をしても未練がましい目で見られ続けたのだ
が…。

「とりあえずフィオの新しい服を買わないとな。」

二人はぶらぶらと街中を歩いていた。

「リンバルってでつかいね！人もいっぱいいるし、すごいすごい
！」

隣を歩いてるフィオは村を出ることはほとんどなかったとの事で、
初めて見る街の様子にはしゃいでいた。少し歩くと服屋があったの
で、そこに入ることにした。

「いらっしゃい。」

出てきたのは若い女主人であつた。

「この子に似合う服を買いたいんだが。」

「オーケー、じゃあこっちにおいで。」

フィオが手招きされ、女主人は奥に入っていった。

「フィオ行つて来な。」

「んー…レンは？」

どうやら一人じゃ不安らしく、レンも一緒に来てほしい様子。

「俺は外にいるよ、服とかあんま分かんないし…あの女性についていけば大丈夫だって。」

レンはフィオに優しい笑みを浮かべながらフィオを促した。

「……わかったよ。」

フィオはとぼとぼと奥まで歩いていった。

レンの意地悪…着いてきてくれてもいいじゃん。と心の中で愚痴を言いながら奥に歩いていくフィオ。奥に着くとすでに女主人が何着が見繕ってくれていた。

「あんたはかわいいからどれ着ても似合うと思うよ。」

そっいいながら選んだ服の中から、一着手に取ってフィオに渡した。何着か試着して女主人に一番勧められた白のシャツにチェックのついた茶色のスカートを買う事にした。

「今着てる服はどうする？結構ボロボロになってるしうちが引き取ってあげようか？」

「じゃあお願いします。」

「この黒い外套はどうするんだい？」

「それは駄目！…持って行きます。」

「そ、そうかい。」

フィオにしては大きい声で即答されたので、女主人もびっくりしていた。フィオは黒い外套を受け取り、レンからあらかじめもらっていたお金で支払いを済ますと、レンが待つ店の外に駆けていった。

「レーーーーン！」

「ん？」

レンは自分を呼んでいる方角に顔を向ける。その方角には赤い長髪を揺らし、手を振りながら走ってくるフィオの姿があった。新しい服似合ってるなーと柄にもない事を考えつつ、こっちに走っているフィオに手を振り返す。フィオはレンの前まで来たのはいいが、走り疲れたのか息を整えている。

「その服似合ってるな。可愛いぞ。」

レンは息を整えているフィオに向けて言う。レンがそういつた瞬間、フィオはぱつと顔を上げレンの手を掴み「ほんとに！ほんとに！」と掴んだ手をぶんぶん振りながらレンに聞く。

「ああ、ほんとだよ。」と微笑みながらフィオに言った。

フィオはえへへーと満面の笑みでレンに笑い返した。フィオはふと黒い外套のことを思い出し、レンに返した。

「ありがとな。」レンはフィオの赤髪を撫でながら言った。

二人はその後も街を散策していた。そうこうしているうちに辺りも暗くなり始めたので、情報収集と夕飯を兼ねて二人は酒場にやってきた。中はかなり賑やかで各々盛り上がっている。レンとフィオはカウンター席に座った。

「いらっしや…ってレンじゃねえか！」

酒場のマスターらしき人がレンを見て驚き、小走りで近づいてきた。

「よつす。マスター元気にしてたか？」

「あたりめーよ！レンより早くは死ねねえな。」といいながらガハハッと豪快に笑う。

「隣にいる子は彼女か？」

「そんなんじゃないって。」レンが呆れた様に言う。

「フィオもなんか言っちゃれよ。」フィオにも弁解をしてもらうために話を振るが、フィオは顔を真っ赤にしながら下を向いてもじもじしていた。

「お嬢ちゃんはあの気らしいぞー。セフィちゃんの時と一緒にだな。」マスターはまた豪快に笑うと「ちょいまってな。てきとーに作ってやるからよ。」といって厨房に向かった。

「レンの知り合い？」

少し時間がたって復活したフィオは首をかしげながらレンに言う。

「俺が部隊にいた頃、この街に魔獣が大量に現れてギルド…まあ簡単に言うとな、傭兵だな、そいつらが街を守ってたんだが相手が多すぎて負けそうになってたところを俺の部隊が助けたんだよ。その夜の酒場でたまたま飯食ったら、マスターがすごい良くしてくれてな。それからの付き合いだ。前は俺とセフィで飲んだりしてたからな。」

「そうなんだ。セフィって人は部隊の人？」

「そうだよ。セフィは俺の部下で第5部隊副隊長やってるやつだ。」

「へーじゃあすごい人なんだね。」

それからしばらくして料理が運ばれてきた。

「いっぱい食べていけよ！」マスターが厨房から顔をだしレン達にそう言つと、忙しいのかまた厨房に戻つていった。

「だつてさ。いっぱい食べな。」

「うん！」フィオは目の前にあるご馳走に目を輝かせ食べ始めた。レンはその様子を見て微笑むのだった。

フィオがご飯を食べ終える前に、レンは情報を仕入れていた。レンの聞いた話では最近魔物の出現率が高くなつてきていること、それに便乗している盗賊がいるなどだが、魔物の話が圧倒的に高かった。レンは村の件も知っているため、魔物の動向が気になり始めていた。ここで一回魔物の討伐をしたほうがいいのかもしいかな、などと考え、明日街の周囲を歩いて見ることにしたのであった。

討伐

「ん…。」

まだ寝起きでボーっとしている思考をなんとか活動させる。昨日はあのあと宿にフィオと一緒に部屋で泊まったんだっけ、そんなことを思い出しながら起き上がろうと試みる。だがなぜか起き上がろうとしているのに左腕が鉛のように重い。レンはゆっくりと左側をみると、昨日はベッドで寝かせたはずのフィオが隣で寝ていた。それを見てレンは微笑む。レンはフィオの赤髪をそつと撫でた。フィオは熟睡しているのか、すやすやと気持ちよさそうに寝ていた。レンはここで無理やり起こすのは可哀想だなと判断し、自らもまた夢の中に落ちていった。

「……ん…。」「…レ…。」

なぜか体が揺れている感覚と、誰かが自分の事をしきりに呼んでいる声が聞こえてきた。レンはうつすらと目を開けた。目の前にはフィオの顔があり、あろう事か目があつてしまう。

二人の間には数秒の沈黙が流れ、先に動いたのはフィオだった。ぱつとレンから飛び離れ、顔を真っ赤にしてあたふたしながら「違うんだよ！レンが寝てたから起こそうと思って！でもなかなか起きないからレンの寝顔を見ようしたんだけどすごいきれいで吸い込まれるようにって！違う！違う！」と矢継ぎ早にしゃべっている。その光景を見てレンはくすくすと声をだして笑った。

そしてフィオに向かって言う。「おはよう、フィオ。」それを聞いたフィオはきょとんとしながら「お…おはようございます。」と言った。

二人は朝食を取りながらこの後の事を話していた。レンは街の周りを見に行くということをフィオに伝え、その間危ないからフィオは宿で待っていてくれといったが、フィオは「絶対着いていく！」とレンの目を見ながら力強く言い、結局レンが折れて一緒に街の周りを見ることになった。

ドゴン！！！！………ズバッ！！！！ギャアアアアアアア……。

先ほどから魔物との戦闘が続いていた。レンはその体からは想像できないパワーで次々と魔物を切り裂き、粉碎していく。その様子はまさに魔王の如く、圧倒的な力で魔物の群れをねじ伏せていった。しばらくすると魔物もいなくなり、レンは大剣に付着している魔物の血を払い背中に担ぎ直す。周りは先ほどまでの戦闘のせいで、魔物の無残な死体が散りばめられている。フィオはレンが大剣を担いだのを見て、レンの服の裾をぎゅっと掴んだ。

「フィオ大丈夫か？」

「…うん。平気だよ。」

レンは明らかにフィオが無理しているのが分かっていて。フィオの頭をぽんぽんとあやすように軽く撫でながら「先に進もう。」と一言いった。

レンは先ほどからの魔物の出現が気になっていた。あんなに続けたまに魔物が出現することは滅多にない。しかも違う種族の魔物が協力して襲ってきている。精霊ならばかなりの知性があるので協力して襲う事もできるのだが、精霊は魔物と違い人を襲うような事はないはず。何かがおかしいとレンは一人考えていると「レンあの人魔物に追われてるよ！」フィオが指を差し大声で言う。

その方角を見てレンは一瞬驚いた。確かにこちらに走ってきているのだが、あれは人ではない…エルフだ。

「フィオ、俺の後ろから離れるなよ！」そう言いながら担いでいた大剣を手に取り構えた。

「そのエルフ！！！！そいつら引き受けてやるからどいてろ！！！！」

走ってきているエルフはその声が聞こえたのか、「頼みます！」と返した。

その間にどんどん距離は近づき、エルフがレンの横を駆け抜けた。そして数十秒後魔物が目前に迫る。

レンは大剣を真横に振りぬく。先頭の三体は無残にも真つ二つになり絶命した。後ろに続いていた内の三体はレンの力を本能で危険と感じたのか距離をとったが、残りの二体はそのまま突っ込んできた。レンは大剣を振りぬいた力を利用し、後ろ回し蹴りを叩き込んだ。突っ込んできた魔物の片方はそれをもろに受けて、横に並んで突っ込んできた魔物を巻き込みながら吹っ飛んでいった。レンは後ろの三体を仕留めるため突っ込む。二体の魔物はレンに向かって炎の塊を吐き出し、もう一体は翼をひろげて羽ばたいた。レンは炎の塊が目前まで迫っているのにも関わらず、大剣を構えながらスピードを上げる。そしてそれが着弾する寸前に大剣で一閃する。だが炎の塊はそこで爆発し、辺りを燃え上がらせた。

フィオはこれまでの戦闘を見てきて、レンの桁違いの強さを肌で感じていた。だがやはり心配なものは心配なのだ。無意識に握り締められていた手を胸に当て、レンの後ろにあつた木に隠れながら先ほど走ってきたエルフと一緒にレンを見る。

エルフは息を整えながら「すごい…。」と呟いた。レンはすでに五体の魔物を蹴散らし、前にいる三対に迫っていた。だがそのうちの二体が炎の塊をレンに向かい吐き出した。フィオたちは当然それを避けると思っていた。だがあることからレンはそれに向かい走っている。…そして着弾した。

エルフは「うそでしょ？」と呆然になりながらポツリと言った。辺りは炎の海になっている。フィオは「レ……ン……？」と呟く。そ

してフィオの中で何かが壊れた。

「きゃあああああああ！！！！！！！！」フィオを中心に圧倒的な魔力が放出され爆発した。周りの木々をなぎ倒し、地面を抉った。

レンは炎の塊を一閃した後、燃え盛る炎の中を駆けていく。もともとレンの戦闘スタイルは特攻型で、第五部隊隊長だった時も自ら死地に飛び込む人だった。いつも戦闘が終わると部下のセフィリアに泣きつかれ、第四部隊隊長のプラムに怒られながら治癒してもらっていた。

今回もすぐ終わるはずだった。炎の中を駆け抜け終わり、外に出た瞬間「ツツツ！！！！！！」レンは後ろを向く。

レンは魔力がないので普段は全く分からないのだが、それでも感じられるほどの魔力だった。レンに向かって木々が飛んでくる。それを避けながら前を見ると、先ほどのエルフが飛ばされてきた。レンはエルフが飛ばされてくる位置に走り抱きとめた。幸い怪我はしてないが気を失っていた。周りを見ると先ほどの魔物たちは飛んできた木々が突き刺さり息絶えていた。エルフを安全な所に移動させ、自らの外套を優しく掛けてやった。そして少女に目を向ける。フィオの周りには魔力と思われる黒い霧みたいなものが渦巻き、目は虚るでどこを見ているのかも分からない状態。

「フィオ！！！！」レンは叫びながらフィオに向かって走る。フィオはゆっくりとした動作でレンの方に向いた。目は虚ろで焦点があ

っていない。そして手をレンに向けたその瞬間、黒い炎の塊が飛んできた。先ほどの魔物の炎よりは小さいが、レンは本能的に危険と感じ避けた。その炎が地面に着弾した時、天を貫く黒い火柱になり辺りを焦した。レンはその光景にはまるで興味がなにかのようにフイオを見続け、足を止めずに駆ける。レンの中には、なぜか恐怖はなかった。むしろ昔からこの圧倒的な魔力の感覚を知っていて、どこか懐かしい感じが心の中を満たしていた。そしてフイオのもとまで走り抜き、優しく抱きしめた。

そして耳元で「フイオ…俺はここにいるよ。」と語りかけた。そうするとフイオの体から力が抜け気を失い、同時に魔力も嘘のように消え失せた。

レンはフイオを抱えなおし、エルフの隣まで来ると「さすがにきついな…。」と呟き、空を見上げるのであった。

帰還、そして再会

レンは困っていた。さすがに二人同時に運ぶのは無理だし、かといって一人置いていくわけにもいかない。レンは苦渋の末、エルフを起こすことにした。レンはエルフの体を優しくゆすり言う。

「おい、起きてくれ。」

しばらく続けているとエルフはうつすらと目を開ける。そしてレンの顔をしばらくみて、起き上がった。

「私生きてるの？」レンに問う。

レンは無言でうなづいた。

「それより怪我はしていないか？」

「ちょっと体が痛いぐらい。あの子から魔力が流れ出す前に、ちよつと回避したから…そんなことよりこの子は何者？」

「さあ…今分かってるのは俺の仲間ってだけ。」

それを聞いたエルフは、数秒固まった後笑った。

「うふふ…仲間ねえーそつかそつか。」エルフは笑いながら、おもしろい人だわと思った。

それから二人は街に向かって歩いていった。フィオはレンが抱きかかえている。

「なあ、名前なんていうんだ？」

「私？私はエルフのアルシュナよ。アルシュナって呼び捨てで構わないわ。あなたは？」

「俺はレン、こっちはフィオ、同じく呼び捨てでいいぞ。それでアルシュナはなぜ魔物に襲われていたんだ？」

「ちょっと外に木の実を採りに行こうと思ってね。すぐ近くで採るから弓とかも置いて来ちゃって…そんな中魔物達が襲ってきたからびつくりしました。」

「そつか…帰らなくていいのか？」

「んーほんとに帰らなくちゃいけないんですけど、助けてもらったのでお礼を「そんなの別にいいぞ。」

レンがアルシュナの言葉を遮る。

「そうですか…ですが嫌です。」アルシュナは笑顔で言う。

「私がしたいからするんです。だからいいですよね。」

「…勝手にしろ。」レンはアルシュナの笑顔に負けたのであった。

街に到着する頃には日も暮れていた。レン達は宿に帰り、フィオを寝かせる。その後二人は軽くご飯を食べて、その日は早めに休んだ。

「フィオはまだ起きないか…。」

次の日の昼頃に二人は起きたのだが、フィオは寝たままだった。

「あれだけの魔力を放出したんだからしょうがないわ。もう少し寝かせておきましょう。」

「…そうだな。」レンはしぶしぶながら納得することにした。

「ねえレン、私あの魔物達の動向が気になるの。いままで多種族が群れで襲ってくるなんてなかったし…村も心配だから一回村に戻ってもいいかしら？」

「ああ、構わないぞ。だが一人でいくんだったら武器くらい持っていないとな。こんな状況じゃなかったら俺もついていけるんだが…」

「分かってるわよ。だから悪いんだけど武器貸してくれない？」

「アルシュナの使う武器は弓だろ？そんなのないぞ。なんなら買っつてやるけど。」

「ほんと！助かります！ありがとうございます！」「アルシュナはレンに御礼を言いながらはいでいた。

「あれってエルフじゃねえ？」

「私始めて見た。」

「すごい…」

レンとアルシュナは武器屋に向かっている最中だ。

「来たときはあまり人がいなかったからな…みんなアルシュナみたいな精霊が珍しいんだ。」

「分かってますけど…これはさすがに。」

通りすがりの人やアルシュナ見たさで着いてきてる人もいてレン達の周りは人がたくさんいた。

「悪いな…あれが武器屋だ。入ろう。」

レン達は一般的な弓を買い、武器屋をあとにした。

「じゃあ気をつけろよ。」

「色々ありがとう。まだ御礼してないし、村の様子見て戻ってきたら必ずするね。」

「ああ楽しみにしてる。」

お互い笑いながら別れを告げ、アルシュナは村に戻っていった。

「俺もフィオが待つてるし早く戻ろうっと。」

レンは宿に向かった。

宿に戻ったレンだが、フィオは依然眠ったままだった。レンは買ってきた食糧を置き、フィオの寝ているベットに座る。そしてフィオの赤髪をそつと撫で続けた。

「…いつまで寝てるんだ？置いてくぞ？」そう呟き、フィオに向かって微笑むのであった。

「セフィリア副隊長、黒い火柱が確認された所だと思われるここに到着しました。」

「どんなことしたらこんなことになるのよ…。」

目の前には大きく挟れている大地、そこにあったであろう木々が跡形もなく吹き飛んでいる。その周りの木々もなぎ倒され無残な姿

の大地がそこにあった。

「総員に告ぐ。この辺りに不振な痕跡がないか隈なく探します。」

彼女の部下であろう人達は、彼女の命を受け各々行動するのであった。

「副隊長！残念ながら周りにはなにもないようです。」

セフィリアは少し考えた後「リンバルに向かう。なにか知ってる人がいるかもしれない。」そう部下に言い放ち、リンバルに馬を走らせる。

（すごく手が暖かい…。）

その暖かさはゆっくりと胸の中心に染み渡るように感じられ、レンに抱きしめられた時を思い出した。そして徐々に意識が覚醒する。フィオはゆっくりと目を開けた。まだ本調子ではないのか、風邪を引いたときみたいにくすぐ体がだるく感じられた。そして手のほうを見るとレンが手を握りながら寝ている姿があった。フィオの容態を見て、そのまま寝てしまったのだらう。椅子に座りながら上半身をベッドに投げ出し、すやすやと寝ていた。

（レンありがとう。）

フィオは心の中で感謝し、レンが起きるまでレンの寝顔を見るの

であつた。

「ん…」

「おはようレン。」

「おふあよう…」

レンは欠伸をしながら挨拶をする。

（あれ？この部屋って俺とフィオしかないよな。）

そしてフィオが寝ていたところに目を向ける。

「おはよう。」

フィオはレンに笑いながらもう一度いった。

「フィオ！」

そっついながらレンはフィオを抱きしめる。フィオは顔を赤くしながら「苦しいよレン。」といった。

しばらくふたりでまったりしながら、これまでの事をフィオに話した。フィオはあまり覚えてないらしく、レンが炎の塊に突っ込ん

だ所までしか分からないみたいだった。

「なんか色々迷惑掛けちゃったな。ごめんねレン。」

「気にするな。それよりだるかったりしないか？」

「ちょっとだけ体が重い感じかな。」

「そっか、飯は食べそうか？」

「うん。お腹ペッコペコだよー。」

フィオはおなかを押さえながら恥ずかしそうに言う。

「じゃあまずは腹ごしらえだな。」そう言い二人は外に出て行った。

「マスター。」

レン達は酒場に来ていた。

「ん…なんだレンじゃねえか！この前から全然顔ださねえからどっか行ったのかと思ったぜ。」

「まあ色々あってな。とりあえず飯頼むわ。」

「はいよー！」

マスターは厨房に入っていく。少しするとマスターと店員が料理を持ってきた。

「できたぞ。まあゆっくりしていけ。」

それだけ言うとまた厨房に入っていく。

「サンキュー。じゃあいただきますか。」

「いただきます。」フィオとレンは遅めの朝食を摂り始めた。

「エルフと男か…。」

セフィはリンバルに到着した後すぐに情報収集を行っていた。やはりリンバルでも黒い火柱は噂になっているようだ。そんな中火柱が確認された後、エルフと男が街に入ってきたとの情報はいったのだ。セフィはすぐにエルフと男の場所を特定するように指示をした。普通精霊が人間の住んでいる街や村に入ることはない。

（だとしたら契約をしているのか？んー分からない点が多すぎる。）

セフィは考えるのを一時中断し、自分も情報収集するため知り合いのところへ向かった。

「美味しかった。」

「そうだね。マスターの料理大好き！」

「そういつてくれると作ったかいがあったってものだ！」

マスターはガハハツと豪快に笑いながら答えた。レンとフィオは食後の紅茶を飲んでいた。店員さんは食べ終わった皿を厨房へ持っていた。

「これからどうするの？」

フィオはレンに問う。

「もうちょっとこの辺を調べたいんだ。だからフィオはお留守番だな。」

「ぶー…分かったよ。」

フィオはこの前の事件で迷惑を掛けたことが気になっているみたいで今回は素直に引いた。

「だけど必ず帰ってきて…。」

「ああ、だからそんな顔すんな。」

「レンを信じる。」

それまで泣きそうな顔でレンを見つめていたが、レンの言葉を聞

き力強く言つのであった。

「そろそろ出るかな。マスター！お金ここに置いてくぞ！」

レンは厨房に向かって言った。

すると「分かった！また来いよ！」と厨房から聞こえ、レン達は酒場を後にした。

セフィリアはその光景にしばし固まった。あの後姿と漆黒の外套間違えるはずがない…そして言った。

「レン隊長！…！」

レンはいきなり大声で呼ばれ、バツと後ろを向いた。そして言った。

「セフィ！？」

セフィはレンのもとへ走り抱きついた。

「心配したんですよ。いきなりいなくなって…何やってんですか…」

泣いているのか、途切れ途切れに小さい声でレンに言った。レンはそれをあやす様に背中を撫でていた。そして隣にいるフィオはというと、ほっぺを膨らましレンをじーっとみつめるのだった。

調査

「それでセフィがどうしてここに？」

あの一件以降レンはセフィリアが泣き終わるまで宥め続け、落ち着いた所で再び酒場に入った。フィオもしぶしぶといった表情で後続く。

入ったときにマスターから「ついに修羅場か！？」とからかわれたが、レンが苦笑いを浮かべながら事情を説明し、奥のテーブルに座った。俺の隣にはまだ膨れているフィオ、真正面には先ほどの振る舞いを恥じているのか、真っ赤になって俯いているセフィリア。

「隊長は黒い火柱を見ませんでしたか？」

真っ赤に染まっていた顔をぶんぶんと振り、真剣な表情で言う。

「ああ見たよ。こいつが原因だけだな。」

そう入ってフィオの頭をぽんぽんと撫でる。フィオはそれに機嫌を直したのか、くすぐったそうにしながらも微笑んでいた。

「……………ええ！！！！？」

セフィリアは少し固まった後に思いつきり叫んだ。

「あれは何なんですか！ってかこの子から魔力は感じられないで

すけど！」

セフィリアはまぐし立てるように言う。

「そうなのか？てつきりすごい魔力があんのかと思ってたけど違うのか。」

じゃあ俺があの時感じたものはなんなんだろう。そのことについて疑問に思ったが、まああとで考えてみようと思いを切り替える。

「フィオは俺が預かる。あとあまりこの件は周りに言わないほうがいい。」

「ですが…大丈夫、任しとけ。」…分かりました。」

セフィリアが口を挟もうとすると、レンがそれを遮り笑いながらセフィリアに言う。セフィリアはしぶしぶ納得したのだった。

「そういえばまだ紹介してなかったな。彼女はフィオ、今一緒に旅してる真つ最中。」

「セフィリアさんでいいんですね。よろしくお願いします。」

フィオは頭を下げた。

「セフィでいいわよ。こちらこそよろしく。」

セフィも頭を下げた。

「そこでこちら辺の調査が終わったらくれメンツに戻る予定なんだ。」

「ほんとですか!？」

セフィリアは目を輝かせながら言った。

「ほんとだ。それでセフィにはちょっと手伝ってほしいことがあってな。」

「なんですか？」

セフィリアは首をかしげながら聞く。

「最近こちら辺は魔物が多すぎる、それがちよつとひっかつかてな。調査に行くからみんなと一緒に来てくれないか？」

「分かりました。すぐに準備します。」

「準備ができ次第、街の入り口集合な。」

セフィリアは「はい!」と元気よく言った後酒場を出て行った。

「じゃあ俺らも帰ろうか。」「うん。」二人も酒場を後にした。

「待たせたな。」

第五部隊のメンバーは声の聞こえた方向に向く。

「「「「隊長!!」「」「」」

「よつす。元気にしてたか。」

レンは部下に声を掛けていく。レンが率いる第五部隊は少数精鋭で10人ほど、主にクレメンツの領域周辺の治安を守るためにある部隊である。よつてほとんどクレメンツにはいない。各地を飛び回っているのだ。民の間では「漆黒の旅団」と呼ばれ、皆黒い外套を身に着けている。

「隊長そろそろ行きましょう。」

セフィリアも討伐とあっていつもの雰囲気とは違い、凜々しく言い放つ。

「じゃあいくか。」

「「「「はいッ!!」「」「」」

その声と共に街から消えていった。

なぜこんなことになったんだろう。

「こいつらは…。」

男は目の前の光景を信じられなかった。男は盗賊団の幹部で頭から留守を頼まれ、アジトを守るだけの簡単な仕事。そこに魔物が現れるまでは。もう仲間の大半は死体となってそこら辺に転がっている。残った仲間は必死に魔物と戦っているが、戦況は歴然だった。

男は幾度となく修羅場を潜り抜けてきた。3人の傭兵に囲まれて殺しあったりしたし、魔物ともやりあった。近くの村を襲っては皆殺しにしたこともあるし、金を奪うため旅の商人を襲ったことも1度や2度ではない。それがなんだこの状況…足が震えて動けない。そんな中次々と仲間が殺されていく。アジトは辺り一面血で染まり死臭が漂っている。そして最後の仲間が殺された。押し寄せる魔物。男は抵抗することも叶わず、命を散らした。

「なんなんだこいつ等…！」

「頭！逃げましょう…！」

商人から金目の物を奪い帰ってきた男達は、自分達のアジトであった洞窟の中を見て言う。そこには魔物の大群。そして仲間の亡骸。男は感じ取っていた、やばすぎる！！！！

「逃げるぞ！！」

そう言い放ち、仲間である4人と逃げる。魔物達も気付いたのか雄たけびを上げ追ってきた。

「うあああ！」

その中の1人が足をもつれさせて転んでしまった。もう近くには魔物が迫る。

「頭っ！！！！」

必死に助けを請うがその声で足を止める人たちはいなかった。頭と呼ばれた男は後ろから聞こえてきた断末魔の声に耳を傾けることはなかった。生きることには必死だった。

「これで最後つと。」

レンは大剣で最後の魔物を殺す。

「隊長こちらでも終わりました」

後ろを見るとセフィリアと部下達が魔物の戦闘を終えていた。

「そうか。みんな大丈夫か？」

部下は全員無傷で疲れてる様子もない。誰に鍛えられてると思っ
てんですか。とみんなは言いあい、笑いあった。

「ん…」

レンはそんな中、何かが血の臭いと共に近づいていることに気付
いた。

「なにに来るぞ。」

部下達に静かに言う。皆はレンの声に従い、戦闘できる体勢に入
る。

そして「助けてくれ！」一人の人間が魔物から逃げてくる。そ
の人間とはさきほど頭と呼ばれていた盗賊団のリーダーだった。し
かし無情にも魔物に追いつかれ殺された。

「セフィは俺の援護を！他は残った魔物を殺せ！このままだと街までいくかもしれない、一匹たりとも逃がすなよ！」

レンはそう叫び魔物の群れに突っ込む。

「一人で突っ込むような事はしないでって言ったのに！」

セフィは一人呟き、レンの援護をする為後を追う。

他のメンバーは「了解ッ！！」と返答し迎撃体勢をとる。

セフィは腰に差している細身の剣を抜く。刀身は銀色に輝いている。

「雷鳴ッ！」

セフィリアがそう呟くと同時に刀身が青く光り、バリバリと凄まじい音を奏でて雷を纏わせている。セフィリア自身も雷を纏わせ驚くべきスピードで追う。レンはセフィがそうこうしてる内に、魔物と激突する。レンは背負っていた漆黒の大剣で先頭にいる魔物をなぎ払う。だが魔物たちの数は50体は超えている。何体かは街に向かい後方に消えていったが、部下がいるので大丈夫だ。だが残った魔物は次々とレンに襲い掛かる。レンもその力でなぎ払い、切り裂き、粉碎していく。そこにセフィが追いつき加勢する。

（魔法も使わないのに、使って速度を上げている私と同じ速さって…）

セフィはそんな事を考えながら魔物を蹴散らしていく。セフィはその俊足を使い手数で魔物を攻め立てる。魔物はセフィの斬撃を受けると、痺れて動きがかなり鈍くなる。そこをレンが一撃で葬る。二人の連携でたくさんいた魔物は一気に数を減らす。そして最後の魔物も叩き潰した。

「セフィ…気付いたか？」

「そうですね…ここまで統制が取れてるのは怪しい。」

「魔物が来た道を行って見るか。」

「そうですね。」

その会話をしている中、後方での戦いを終えた部下が集まって来た。

「ちょっと状況が分からなくなってきた。お前らは街に戻って街の警護を。住民にも注意を促しとけ。」

「……はいッ！」「」

部下達は急いで街に戻る。

「セフィ行くぞ。着いて来い。」

レンは駆ける。

「はいッ!」と返答しレンの後を追った。

「これは酷いな。」

洞窟の中…そこには血の海と肉塊、魔物の死体もあった。

「おや…まだ人間が?」

奥から人の姿をしたなにかが現れる。レンとセフィリアは身構える。

「あなた達…盗賊の人たちではありませんね?」

「お前はここで何していた。」

レンは男の言葉を無視して問う。

「なにって…見れば分かるでしょう。殺していたんですよ。道具に使おうと思ったのですが、魔物たちが食い散らかしちゃって…残念です。」

男は気持ち悪い笑みを浮かべ言った。それを聞いたセフィリアは動いた。一気に男との距離を縮め斬りかかる。

「なにッ!？」

その言葉はセフィリアからだった。完全に斬りつけたと思ったのだが、そこに男はいなかった。

「危ないですねー。そんなことしたら本気が出ちゃいそうですよ。」

男はそこから少し離れたところにいた。そして男はその距離を一気に縮め、セフィリアの頭を目掛け拳を放つ。

「ぐッ!！」

かろうじてそれを避けたセフィリアだが、もう片方の手からの衝撃波を受ける。

「きゃあ!!!！」

吹き飛ばされたセフィリアだが後ろにいたレンに受け止められる。

「大丈夫か？」

「はい… かろうじて剣で防ぎました。」

レンはセフィリアを立たせ、男を睨む。

「すばらしい！そいつなら最高の材料になるぞ！きみが欲しい！」

男は下品に笑いながら言う。

「っ！！」

男は後ろに飛び退く。

「きさまああああ！！！」

男がいた場所にはレンの姿があった。男は頬から血が流れていた。

「あんま調子にのんなよ。誰がセフィをやるつつた。」

レンは静かに言い放つ。

「俺に傷をつけて帰れると思うなよ！！！」

そして空気が変わる。セフィリアはその重苦しい殺気の中、額に汗を浮かばせ苦しげな表情をしている。

レンは全く気にしてないようで「御託はいいからさ…さっさと来いよ。」と言い放つ。

「人間ごときが！神族に勝てるとおもうなあああ！！！」

男は身の丈くらいある棒を具現化し、突っ込んできた。

「ガキンツ！！」

お互いの得物が交わる。先に仕掛けたのはレンだった。相手の棒を受け流し、横っ腹に蹴りをぶち込む。男はそれを避けると、光球を放ってきた。

（避けられねえ！！）

レンは刀身で受け止めたが吹き飛ばされる。

「隊長！！！」

セフィリアがレンに近寄る。

「大丈夫だって、心配すんな。セフィはどうか隠れておけ、あの殺気はきついだろ。」

レンは優しく微笑むと「俺も全力ださねえーとやばいかも……そして治療してな。」そーいセフィリアの金色に輝く髪を撫でた。

「隊長…。」

泣きそうになるのを必死に耐えて「勝って下さい…必ず！」と言
い残し、洞窟の外にでる。

「セフィにはいつも心配かけるなー。」と一人呟き、セフィのためにも生き残らないとなーとレンは思った。

「話は終わりましたか？」

「まあね。」

レンはそれと同時に駆ける。男は光球を二つ同時に放つ。

「うらあああッッ！！！」

レンは大剣で光球を斬りつけ一つを消滅させ、もう一つは避ける。

「なにっ！！！」

男は驚く、なぜ人間如きが魔法を打ち消せるのかと。そう考えているうちに、レンは大剣を振るう。何回か打ち合い、レンは蹴りも織り交ぜる。男はレンの蹴りくらい真横に吹っ飛ぶ。レンはその後を追い駆け追撃する。男も体勢を立て直し、光球を5つ創る。そしてその光球は男の周りをぐるぐると回りだした。レンはかまわず突っ込む。男の近くに来ると光球がレンに向かい襲ってくる。レンは丁寧にそれらを捌きながら男に斬りかかる。男はにやりと笑い、手の中で創った光球をレンに放つ。レンはそれをもろに受け、真後ろに吹き飛んだ。

「がはッ！！！」

壁に叩きつけられ血を吐く。服も破れ、所々血が滲んでいる。これはやばいかもなーと一人思う。男はさらに光球を放つ。

「くッ！」

ぎりぎりですれを避ける。レンがいた壁は光球が当たり決まっている。レンは息を整え、男に向かって行った。

「なんどやっても同じですよー！」

男は光球を創る。レンは大剣を男に向かい投げる。

「っ！ー！」

男はレンの予期せぬ動きに回避が遅れる。男は光球で剣を防いだ。防いだのはいいが、目の前にはレンの拳が迫っていた。

「ぐぼっー！」

男は豪快に吹っ飛ぶ。レンは近くに刺さっていた大剣を抜き男に向かい走る。男は顔を殴り飛ばされ、ぐちゃぐちゃになった顔で「殺す殺す殺す！ー！！！！！」と叫びながら、先ほどの光球より大きなものを創り放った。レンは心を落ち着かせ光球を見つめる。

そして「うおおおおおおおー！！！！」切り裂いた。

最後にレンは男の胸に大剣を突き刺した。

「ぎゃああああー！！」

男は叫びながら血を吐く。

「終わりだな。お前の目的は何だ？」

レンは男に聞く。

「教えてやるよ、負けたからな。あと少しでな…この世界はジークウエル様の…手に堕ちる。魔物の軍勢でな！そしてもう一つの世界もな…お前らはどっち…みち生きれなゴハツ…いんだよ。」

男は血を吐きながら言った。

そして笑いながら死んでいった。

「なにが起こってるんだ…。」

レンはそう呟き、男に刺していた大剣を抜いた。そして洞窟の外に向かう。もう大剣を杖代わりにしないと歩けないほどであった。そして洞窟の外に出たとき意識を手放した。

遠くから「レン隊長ッ！！！」と叫んでる声が近づいてるのを感じながら…。

待ち人来る

「はあはあ…レン隊長…重いですよ…。」

セフィリアはレンを担いで街に向かっていた。あの後洞窟に出た時、レンが意識を手放した。セフィリアは体中傷だらけのレンを見て背筋が凍った。すばやくレンのもとへ行き生死を確認する。そして生きてる事を確認すると嬉し涙が自然と流れた。

もう上官とか関係なく「レン！レン！」と何度も何度も呼び、倒れているレンの胸で泣いた。そしてレンを担いで街を目指したのだ。

「街まで後ちよつと…。」

そして街のそばまで来ると部下の一人が気付き、一緒に宿まで行くのだった。

「レン！」

フィオはレンが帰ってきたと思い迎えに行く。しかしレンは部下に抱えられ部屋に連れられた。その部屋までフィオは走り「レンは大丈夫なの！？」と近くにいたセフィリアに聞く。

「大丈夫よ。今は疲れ果てて寝てるだけ。」

セフィリアは優しく答えた。レンの部下で治癒魔法が使える人が、

レンに治療を行う。

二人はそれを見ながら「レン…。」「隊長…。」と同時に呟いた。

次の日の朝。

「レン…はやく起きてよ。早く元気になって、どうか遊びに行こう。まだ旅も始まったばかりなんだし。」

フィオはレンの看病をしてた。レンは治療魔法のおかげか傷のほうは完治していた。フィオはそつとレンの顔を見る。すやすやと疲れを癒すように眠っている。時折窓から風が入り、レンのきれいで短めの黒髪がさらさらと揺れる。フィオはつい見入ってしまい、それに気付き一人赤面する。

（今ならキスとかしてもばれないよね…）

そんなことを考えてしまい、ごくリツと唾を飲んだ。そしてゆっくりとレンに近づく、そしてレンと触れそうな距離まで近づいて…「こんこん。」びくッ！フィオはレンから飛びのく。そして「どうぞっ！」と答える。入ってきたのはセフィリアだった。

「そろそろ交代しますね。」

「そっそうですか…ではお願いします。」

フィオは若干焦りながら答え、部屋を出て行った。

「レン隊長…。」

セフィリアは小さく呟いた。

（あの時もつと私に力があれば、レン隊長を助けられたのに…）

セフィリアは自分の力のなさを悔やんでいた。レンがクレメンツを出て行ったあの時から、必死になってレンに追いつけるように頑張った。それがただの足手まといにしかない。ただ純粹に悔しかった。知らないうちに拳を握り締めていた。そして静かに泣いた。

「起きて早々泣き顔見せんよ。」

「ッ!？」

セフィリアはすごい勢いで顔を上げるが、レンに抱き寄せられてレンの顔が見れなかった。

「大丈夫だ。お前を残して死ぬわけねえだろ。それに約束したしな。」

セフィリアはレンの胸で泣き続けた。

あれから数分後、フィオも来て少し話した後、みんなご飯を食べ
ていなかったのでいつもの酒場に行くことになった。

「今日は祭りとかあるのか？」

「…そんな行事があるなんて聞いてないですよ。」

セフィリアが片言でレンに返す。三人の周りにはかなりの人だ
りができていた。なぜかというレン達が「漆黒の旅団」だとい
うことが街の人たちに知り渡ってしまったのである。昨日レンが大怪
我をして帰ったときから、シンボルである漆黒の外套を着ている人
が集まっていたので噂になっていたのだ。セフィリアは前から分
かっていたが、レンは全く気付かない。それに加えてレンの隣にい
る二人が目当ての人も多い。フィオは長めの赤髪を揺らしながらニ
ニコとひまわりのように笑い、レンと手を繋いでいる。セフィリ
アは長めの金髪を後ろで纏めて、笑ってはいないがレンのすぐ隣を
幸せそうに歩いている。どちらも美少女と美女で、注目を集めてい
るのだ。そして皆を引き連れながら酒場に到着した。

「マスターご飯頼むよ。」

「おう！レンか！セフィちゃんもフィオちゃんもいらっしやい！
すぐ作るから待ってな。」

マスターは元気のいい声で言い厨房に入ってしまった。さすがに街

の人たちは酒場までは入ってこなかった。

「ねえレン、もうクレメンツに向かうの？」

「あー…アルシュナを待たなきゃいけないんだ。だからクレメンツはもうちょっとまってな。」

「「アルシュナ？」」

二人は首をかしげる。

「二人には言ってなかったな。セフィが来る前にエルフを助けたんだよ。そのエルフがアルシュナっていうんだ。」

「あーあ那时的！」

フィオは思い出したのか、少し大きな声で言った。

「なるほど。ですがなぜ待つんですか？」

「なんか助けた御礼をしたらしくてな。村の様子が気になるからっていったん帰ったんだ。…でもそれにしては遅いなあ。」

レンは村に戻ったアルシュナのことを想ったのだった。

三人はご飯を食べ終え街を周ることにした。

「ねえねえ！あそこに入ってみようよ！」

フィオが指を指した先には、装飾品がおいてある店だった。

「行ってみるか。セフィもいいだろ？」

セフィリアもレンの言葉に頷き、三人で店に入っていく。中には色々な装飾品が並べられていた。

「似合う？」

フィオが赤の装飾が施されているブレスレットをつけて、レンに見せた。

「ああ、すごい似合うぞ。」

レンは微笑みながらフィオに答えた。フィオは無邪気に笑い、はしゃいでいた。ふと隣を見ると、セフィリアがある物を見ていた。レンはその様子をみて、セフィリアが見ていたイヤリングを手に取り、セフィリアにそっとつけてあげた。

「うん。この銀のイヤリングすごくシンプルだけど、セフィに似合ってる。」

セフィリアはレンの行動に最初は啞然としていたが、すぐに意識を取り戻すと顔を赤くしながら顔を伏せた。

そして小さく「ありがとうございます…。」と呟いた。結局レンは二人にブレスレットとイヤリングを買ってあげた。フィオはレンに抱きつき「ありがとう！大事にするね！」と興奮しながら言い、

セフィリアはイヤリングを大事そうに持ちながら「大切にします。」
と言って、レンに小さく礼をした。

それからみんなでぶらぶら街を見ながら時間が過ぎ、夕方になっていた。

「そろそろ戻ろうか。」

「うん。」

「そうですね。」

レンの言葉にそれぞれ頷くと、三人は宿に向かって歩き始めた。
二人は先ほどレンからプレゼントしてもらったブレスレットとイヤリングを身につけ、とても上機嫌だ。レンはそんな二人を見てプレゼントして良かったと、心から思ったのだった。

三人は宿に着くと、中が騒がしいことに気付いた。

そして中に入ると「レン！」そこにいたのはアルシュナだった。

「どうしたんだ？」

レンはアルシュナに問いかける。

「村が魔獣に襲われて！助けてレン！」

アルシュナはまくし立てるように答えた。

「セフィ…皆を集めて街の入り口に集合させてくれ。」

「了解。」

セフィはすばやく部下の所へ行く。

「レン！私もいく！」

隣にいたフィオがレンに言う。

「…分かった。だが大人しくしてるんだぞ。」

レンは優しく語り掛けるように言った。

（あの親族が関係してるのか？）

レンは考えるが、答えはでない。

「アルシュナいけるか？」

「はい！村まで案内します！」

そういい、三人は街の入り口まで行くのであった。

エルフの村へ

「準備が整いました。いつでも行けます。」

セフィリアがレンにそう伝える。

「よし。アルシュナ案内を頼む。」

「でもレンとセフィリアの乗る馬はどうしたの？」

アルシュナは疑問に思ったことを伝える。レンとセフィリア以外は馬に乗って待機しているが、辺りを見渡しても他に馬はいない。当然アルシュナは乗ってきた馬を連れているので問題はないが…。

「俺らは大丈夫だ。それより早く案内しないとやばいんじゃないのか？それとフィオをできれば一緒に乗せてあげてくれ。」

レンはそっけなくアルシュナに言い放つ。

「分かったわよ。遅れないで着いてきてよ！」

アルシュナとフィオはすばやく馬に乗り、村に向かって行った。

「アルシュナ、あれか？」

隣で馬に乗っているアルシュナにレンは言う。アルシュナはそれに頷く。村には結界を張り巡らせているためまだ無事だが、その結界を破壊しようとする魔物の大群が村の入り口にいた。

「結界ももう持たない！早く戻らないと！」

アルシュナはそういうとさらに速度を上げる。

「先行くぞ。着いて来いセフィ！」

短くそう言い放ち、魔物に向かって一気に速度を上げた。

「なッ！！！！」

アルシュナは驚きのあまり声を上げる。馬と同じ速度で走っているのでさえ尋常じゃないのに、速度を上げた馬を一気に抜いてどんどん距離がひらいていく。あっという間にかなり離れてしまった。

「…七十くらいか。セフィ、あの横つ面に雷撃を撃って貰えるか。」

「了解。」

セフィリアは右手に雷を纏わせ集中する。レン達があと少しで魔物と接触できる距離になったとき、セフィリアはそれを放った。そこから放たれた雷は激しくバチバチと音を奏でながら魔物達の大群の中に炸裂した。魔物達の半分は気付く間も無く感電して焼け死んだ。そこに漆黒の大剣を手に持つレンが突っ込む。魔物達が紙切れのように斬り飛ばされる。セフィリアもようやく追いつき、雷を纏いながら細身の剣で援護する。レンは先陣をきって魔物の大群を蹴散らし、新たな道を作っていく。セフィリアは魔法を使い、レンのフォローをしながら周りの魔物を雷を纏わせた剣で斬り裂いていく。二人の活躍により魔物達は村に入ることできなかったのだった。

「嘘でしょ……」

辺りは敵であつた魔物の死体、死体、死体。その中に返り血を浴びて真っ赤に染まっているレンと、その横に静かに佇むセフィリアの姿。アルシュナはまるであの魔物の大群が、夢であつたのかのようには思えて仕方がなかった。精霊であるエルフでもあの大群を相手するには難しい。それをたった二人で全滅させたのだ。

「アルシュナ、村にいる人は怪我とかしてるのか？」

「えっ……ええ。」

いきなりレンに声をかけられたアルシュナは、びくっと肩を震わせた後短く答えた。

「お前らは周りに魔物達がいるか確認してくれ。」

「「「はいっ」「」」」

レンの部下は散り散りになって周りに散らばる。

「セフィとフィオは村の様子を見てきてくれ。いいよなアルシュナ?」

「構わないわ。」

「俺はここで部下を待つてから村に入るから。」

レンがそう言うのを聞いたアルシュナたちは村へ入っていった。

レンは返り血で真っ赤に染まっていたので近くの川で血を洗い流し、身なりを整えてから部下と合流した。

村の近くまで来ると「レン!」と手を振りながら走ってきたフィオの姿が見えた。

「村の様子はどうだった?」

レンは嬉しそうに抱きついてるフィオに頭を撫でながら聞いた。

「村の方は問題ないみたい。ただ結界を張ってたエルフは魔力を

使いすぎで疲れてるみたい。」

「そっか。じゃあ村まで行こうか。」

レンはフィオと仲良く先頭を歩き、その後ろで二人を微笑ましく見ている部下と一緒に村までゆっくりと向かった。

「君がレン隊長かね？」

村に着いて村長と思われるエルフに声をかけられた。

「はい。王都クレメンツ第五部隊隊長のレンと申します。」

レンは自分の名を名乗り、軽く礼をする。

「私はここで村長をやっているものだ。村を救ってくれてありがとう。」

村長は短くそういって深々と礼をする。

「今日はその御礼といっでは何だが、精一杯もてなしたい。いいかな？」

「そんな大層なことをしたつもりではありませんし、そんな気を使っていたかなくても大丈夫ですよ。」

「ちよつと待った！」

村長の隣にいたアルシュナがレンに興奮気味に言い放つ。

「まだ私の御礼もまだなんだし、一日くらい平気でしょ。」

「…分かった。」短くそう言うと、アルシュナは満面の笑みを浮かべながら「そうこなくっちゃ!」といい、村長と宴の準備をしに行った。

「………かんぱーい!!!」「……」

その夜、村の人たちと共に宴が開かれた。レンの部下も思い思いの場所へ行き宴を楽しんでいる。だがこの二人は違った。

「むーッ。」「じーッ。」

フィオとセフィリアはある一点を見つめている。その先にはレンとアルシュナの姿があり、二人は仲良く葡萄酒を飲みながら話している。それだけならまだいいが、二人の距離がかなり近い。レンとアルシュナは隣に座りながら話しているが、お互いの体がほとんどくっついている状態。それを少し離れたところからフィオとセフィリアは葡萄酒を片手に不機嫌オーラ全開で見っていた。

「レン、ほんとにありがとう。」

「別にたいしたことじゃないさ。」

レンとアルシュナは宴の会場から少し離れたところに座っていた。宴の最中にアルシュナにふたりで少し飲まない？と誘われたのだ。もちろんレンは快く了承し、この場所まで来た。

「これからどうするの？」

「明日にはこの村を出るつもりだよ。クレメンツにも帰って来いって言われてるしな。」

「そうなんだ…。」

アルシュナは寂しそうに言う。

「そんな顔すんなって、もう一生来ないわけじゃないしな。アルシュナがクレメンツに遊びに来たっていいんだぞ。」

「ほんとッ！そんな事言われたら絶対行っちゃうよ！それでもいいの？」

アルシュナは興奮気味に言い放つ。

「構わないよ。むしろ大歓迎だ。」

レンはそう言うつとアルシュナの茶髪をくしゃくしゃと掻き撫でながらいった。

アルシュナは顔を赤くしながら「やめてよー。」とおどけた感じで言い、しばらくじゃれ合っていた。

「ありがとうございます。」

「もうちょっとゆっくりしてもらっても良かったのじゃがな…。」

村長は残念そうにレンにいった。レン一行は予定通り次の朝クレメンツに向かうとのことで挨拶をしていた。

「すみません。また近くを通ることがあつたら寄らせてもらいますよ。」

「そのときは歓迎するぞ。遠慮しないで寄ってください。」

「ありがとうございます。では。」

レン一行が村を出ようとしたとき「レンッ!」そう叫びながらアルシュナはレンの近くまで走ってきた。

「どうしたんだ?」

「これをレンに…お守りだから。」

そう言つと少し背伸びをしてレンの首にネックレスをつけてあげた。

「ありがとう。大事にするな。」

「うん。私絶対遊びに行くから…待ってってね。」

微笑みながらレンに言う。

「待ってる。…じゃまたな。みんな出発するぞ。」

そしてレン一行は村をあとにしたのだった。

帰国

「着いたか。」

目の前には三大都市の一つ、王都クレメンツ。

「帰国したんだし挨拶でもしてくるか。セフィとフィオも行くだろう？」

レンの言葉に返事はない。

「…どうしたんだ二人とも、村から出てからなんか不機嫌だな。」

レンの少し後ろを歩いてる二人を見つめながら言う。

「ふんツ。」「そんな事ないです。」

フィオはレンの顔を見ようとはせずそっぽを向き、セフィリアはかるうじて反応するもいつになく刺々しく言い放つ。レンは首をかしげ、ふーツとため息を吐きながら前を向き歩き始める。

「じゃあ挨拶は一人で行くからいい。二人は散策でもしてな。」

「えッ!？」

それを聞いて声を上げたのはフィオだった。その声に反応してレンは再び後ろを向くと、泣きそうな顔をしているフィオの姿と少し寂しそうにしているセフィリアの姿。レンは心の中で何がしたいんだ?と疑問に思っていたが、二人が話さないならしょうがないなと

思い、再びクレメンツに向かって歩き始めた。

そんなレンを後ろで見ていた二人は「レン…。」「隊長…。」と小さく呟いていた。

レン一行は王宮についたので、部下達には少し休んでから通常勤務に戻れと指示を出し、いったん解散した。レンはそのまま国王に挨拶すると共に神族と名乗る強者がいたこと、魔物の異常な出現率と統率力、これらを報告しておこうと考えていた。そして国王の間に行こうと歩もうとしたとき、急に後ろから引つ張られた。そして後ろを向くと自分の服を引っ張っているフィオの姿があった。

「どうした？」

レンは少し屈みながら優しくフィオに語りかけた。

「…レンと一緒にいい。」

涙目でレンを見つめ小さな声で言った。

「…そっか。じゃあ一緒にいいかな。」

レンは立ち上がるとフィオの赤髪を撫でた。フィオは控えめにレンに抱きつきながら、おとなしく撫でられていた。

「失礼します。」

レンは目の前にいる国王を見ながら言い、礼をする。

「おう。レンじゃないか。久しぶりだな。」

とても国王とは思えないような気軽な物言いでレンに声をかけた。

「長い間部隊を留守にして申し訳ありません。」

「気にすることじゃない。俺もお前が記憶喪失なのは知っているし、その記憶を探してるのもな。そもそも第五部隊は独立部隊だし、お前が立ち上げたんだろ。好きにしてくれて構わないぞ。おかげで王都周辺は前より治安が良くなっているしな。」

国王は笑いながらレンに言った。

「それで報告なんですけど…魔物の数が以上に増えていました。しかも今まででは考えられないんですが、群れをなしています。少し気になったんで調査したところ奇妙な男に出会しまして、自分のことを神族と名乗っていました。そいつが死に際にこの世界はジークウエルの手に堕ちると。」

「…そうか。そんなことが…。こっちでも調べてみる。」

「お願いします。」

「それで隣にいるかわいらしい子は誰なんだ？」

「この子はフィオです。旅の途中で色々あって一緒に行動していただきますけど。」

「なるほど、よろしくなフィオちゃん。」

「よろしくお願いします。」

「ああ、それとシャルがお前を探していたぞ。会いに行つてやれ。」

「分かりました。ではこれで失礼します。」

レンとフィオは国王の間を後にした。

「じゃあ街に出てみるか？」

「シャルのことはいいの？」

「まだここにはいるつもりだし、会ったら長そうだしな。そしてらフィオと散策行けなくなるだろ？」

レンはフィオに微笑みながら言った。

「…ありがと。」

フィオは真っ赤に染まった顔を伏せながら小さく呟いた。

「うわー！すごいでっかい！」

あれからレンとフィオはクレメンツを散策していた。フィオは初めて見るものが多いせいか、目をキラキラさせながらはしゃいでいる。レンはそんなフィオを微笑ましく見ながら、久々のクレメンツを楽しんでいた。

「ねえねえレン！今度はあっち行ってみようよ！」

フィオはレンの手をとりながらぐいぐい引く張る。

（フィオが機嫌直してくれたし、つれてきてよかったな。）

レンは心の中でそう思っていた。

「そんな急がなくても大丈夫だよ。」

くすくす笑いながらレンはフィオと手を繋ぎ歩いていった。

「いらっしやい！いらっしやい！こっちのりんごは甘くておいしいよ！買った買った！」

「この魚は脂がのってっておいしいよ！だまされたと思って買ってきな！」

「最高級のお肉だぜ！買ってかなきゃ損するよ！」

レン達は市場に来ていた。辺りは昼すぎにもかかわらず、すごい活気で賑わっていた。

「わッ!？」

フィオが人にぶつかりそうになったところをレンが抱き寄せる。

「人が多いからあんまりきよるきよる見てると危ないぞ。」

「…分かった。」

フィオは耳元で聞こえるレンの声に体を強張らせながら小さく言う。

（私絶対顔赤いよー!）

フィオはそう思い下を向こうとしたが、またぶつかったりしちゃうなと思い直し、前を向いて歩き始めた。

なんとか二人は市場を抜けたので、少し休憩しようということではベンチに座っていた。

「なんか飲み物買ってくるよ。フィオはちょっと待ってな。」

レンはそう言うとベンチから立ち上がり、店のほうに歩いていく。フィオはレンの言葉に頷き、歩いていく後姿を見ていた。

「すみません。ぶどうジュースとコーヒーを二つ貰えます?」

「はいよ!ちょっと待っててね。」

店員が飲み物を用意するため、奥に入ってしまった。

「…セフィいるんだろ。」

レンはすぐ脇にある路地に向かって言う。するとその路地からセフィリアが出てきて「…すみません。」と申し訳なさそうに謝った。

「どうしたんだ?」

レンは優しく聞いた。セフィリアは下を向いていて答えない。

「お待たせしました。」店員奥のほうから飲み物を持って来た。

「…ほら。」

レンはセフィリアにコーヒーを渡した。セフィリアは顔をあげ、驚いた表情でそれを受け取る。

「もたもたしてると置いてくぞ。」

レンはそっぴいながら残りの飲み物を持ってその場を後にする。

それを聞いたセフィリアは驚きながらも、レンの後を追った。

「そろそろもどるか。」

あれから三人で話したり、街を見て周ったりしていたらすっかり夕方になってしまった。

「うん。」「そうですね。」

二人とも笑顔でレンに返す。セフィリアは合流したときはぎこちなかったが、三人で過ごしてるうちに自然と笑うようになっていた。

「また三人でぶらぶらしたいな。」

レンは自然と声に出していつてしまった。

「私もまた一緒に行きたい!」「私も…行きたいです。」

フィオは満面の笑みで、セフィリアは控えめに答えた。夕焼けの光が射す中、三人は仲良く王宮に戻っていくのであった。

日常

翌朝、レンの部屋にはすごい勢いで入ってきた二人のおかげですごい賑やかになっていた。

「レン！話があるの！」

「ふぁー……。何だよこんな朝から。」

レンはまだ眠たいのか、目を擦りながら声のするほうを向いた。

「げっ……。シャルじゃないか。」

レンは声の主をみた瞬間、眠気がどこかに吹っ飛んだ。目の前には怒ってる顔のシャルと泣きそうな顔のクルルの姿が。

「……おやすみ。」

レンは現実逃避に走ったが「帰ってきて声もかけてくれないし、朝はその態度なのねッ！」。「レン様は私に声をかけられると信じておりましたのに……。」

それを聞いたレンは素直に謝ることしかできなかった。

「おはよう。」

「おはよーレン！」

「隊長すごく疲れている顔をされてますが…。」

フィオとセフィリアは仲良く食堂で朝ごはんを食べていると、疲れきった表情のレンが朝ごはんを持って来た。フィオはレンを見た瞬間、にぱッと笑い元気よく挨拶をし、セフィリアは疲れきっているレンを心配する。

「シャルにつかまってな…朝から酷い目にあった。」

レンはフィオ達の席に座りながらセフィリアに言う。セフィリアはなるほどと思い、数回頷いた。

「今日は何するの？」

「今日は他の連中に挨拶しようかなーと。フィオ達もいくか？」

「いくッ！」

「私は部下の訓練があるので、隊長も時間があつたら来て下さい。」

「そうだな。後で顔を出すよ。」

そうして三人は会話を楽しみながらご飯を食べていった。

食事を終えたレン達はセフィリアと別れ、城を少し見て周っていた。

「あれは…、おーいプラム！」

レンは知り合いを見つけたのか、手を振りながら大声で呼んだ。すると向こうも気付いたのか、こっちに向かって歩いてくる。その姿はフィオよりも少し背が小さく、160cm前半で髪は淡い青色のショート、白衣のような白いローブを着ている。

「レンじゃないか。いつ帰ってきたんだ？」

「昨日かえってきた。挨拶が遅れて悪かったな。」

「それは別に構わない。その子は？」

「フィオって言うんだ。途中色々あつて一緒に行動してる。」

「そうか。私は第四部隊隊長のプラムという者だ。よろしくなフィオ。」

「よろしくお願いします。」

「それで他の連中とは会ったのか？」

「いーや。まだなんだ。」

「ならちよーどいい。皆、修練場に集まることになっている。」

緒に行くか？」

「おう。」

そのあと、レンとフィオはプラムの後についていった。

「うおおおおお！！！！」

「うらああああ！！！」

「キイイイイン！！！！！」

「おーやつてるやつてる。今日は合同演習の日だったのか。」

修練上では、兵士達が本番さながらの試合をしている。兵士がほとんど来ているだけあって、修練場は人でいっぱいになっている。フィオはレンの隣にいるが、あまりの気迫に心ここにあらずという感じた。

「私達の部隊が待機していないと、怪我人続出だからな。」

プラム率いる第四部隊は医療、回復専門の部隊である。他にもダムロス率いる第一部隊は接近戦専門の部隊、キャロル率いる第二部隊は遠距離専門の部隊、ノウエル率いる第三部隊は魔法専門の部隊などで、それぞれ特化している能力がある。だがレン率いる第五部

隊は特化している部分はあるもののほとんどの者が、それ以外の能力も高い。

レン率いる第五部隊はもともとなかった部隊だったが、ギルドで活躍していたレンがたまたまシャルとクルルを助けたのがきっかけで、王国で傭兵することになったのだ。最初は第一部隊に配属されることになっていたのだが、ダムロスとの演習でダムロスを打ち破り、自ら隊長になる部隊を編成した。そのとき各部隊から何人が勧誘し、編成されたので能力がバラバラになっている。

「ん…あれはセフィじゃん。あいつも演習するのかな？相手はキヤロルか。」

「キヤロルか…ではないわ！キヤロルは隊長だぞ！実力が違いすぎる…お前も隊長なんだから分かるだろ！」

プラムはそう言い放つ。それを聞いたレンは笑いながら答えた。

「まあ、見てなつて。」

セフィリアとキャロルが向き合っている。キャロルは余裕があるのかリラックスしている感じだが、セフィリアはがちがちになっている。

「よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしくね。」

セフィリアの姿を見つめながら、キャロルは笑いながら返す。そのとき場外から声が聞こえた。

「セフィー！緊張なんかしてんな！自分の力を信じろ！」

その声のする方角に二人はバツと向いた。他の修練をしている人たちも勢いよく向いた。

「レンツ！？」

キャロルはレンがいることに驚いたらしく、自然と口から声を出していた。周りもレンの登場に驚いているらしく、ひそひそと話し声が聞こえる。レンはセフィに向かって微笑みながら、右手を握り前に突き出した。セフィも数秒遅れてそれに反応し、自分の右手を握り締めながらレンに向かって突き出した。

「準備はいいか？」

審判を受け持ったダムロスが低い声で二人に言う。

「いいわよ。」

「大丈夫です。」

二人は短くダムロスに伝える。セフィリアはレンのおかげで緊張がほぐれたのか、先ほどより動きが硬くない。

「では…はじめ…!!」

戦いの火蓋が切って落とされた。

最初に動いたのはキャロルの方。腰からさげている二丁の魔法銃をすばやく掴み上げ、セフィリアに向かって撃つ。セフィリアはそれを知っていたかのように、真横に飛んでかわした。そして自分の得物である剣を持ち力強く唱えた。

「雷鳴ッ!!」

瞬間、セフィリアと剣は蒼い光に包まれる。剣は帯電しているのかバチバチと音をたて、蒼い閃光が走っている。これには皆が驚いた。ただ一人それを嬉しそうに見ているレンを除いて。セフィリアは蒼い閃光を走らせながらキャロルに向かう。

「ツツツ!!」

キャロルは尋常じゃないスピードで近づくセフィリアを危険と察したのか、魔法銃を撃ちながら走る。セフィリアはそれを剣で防ぎながらもキャロルに近づいていく。だがキャロルもやすやすと近づかせない。キャロルはにやりと笑みを浮かべながら魔法銃を撃ち放つ。セフィリアはさっきと同様にそれを剣で防ぐ。その瞬間、バンツという破裂音と共にそれが爆発した。

「くツ!!」

セフィリアは爆発の瞬間後ろに跳んだが、ダメージはさすがに殺せなかったのか苦しい表情を浮かべ、服は所々燃えた後のような穴があいている。キャロルはここぞとばかりに追撃する。セフィリアは迫ってくる弾を寸前でかわす。後ろから爆発音を聞きながらセフィリアは考えていた。

（だめだ負けちゃう…）

その時、ふとレンの言葉が蘇る。

（自分の力を信じないと…まだいける!!）

目の前に迫りくる弾丸を避け、集中する。だがキャロルは隙をつくらせない。そしてセフィリアに当たると思われた次の瞬間、落雷のような轟音が響き渡り、セフィリアが一瞬強烈な蒼い光に包まれる。そして消えた。それを見ていた人達は驚く、そしてその光景を一番間近で見ていたキャロルも同じだった。

「お疲れ…セフィよくやった。」

その声でキャロルはハッと後ろを向く。そこにはレンに抱かれながら気絶しているセフィリアの姿。そして…

「…勝者キャロル！」

沈黙の中ダムロスの声が響き渡り、終わりを告げた。

新たな旅立ち

「ん…。」

セフィリアはそつと目を開けた。目を開けるとどこかの部屋に寝かされてる事を知る。セフィリアは気だるそうに体を起こした。

（負けちゃったな…）

ぼんやりとそんなことを考えていると、静かにドアが開く音が聞こえた。ゆつくりドアの方に向くとプラムとフィアの姿があった。

「あッ！！セフィ大丈夫？」

フィオはセフィリアの寝ていたベッドに走り寄って聞く。

「大丈夫だよ。ごめんねっ…心配かけちゃって。」

「そんな事ないよ。セフィすごかったよ！！みんなびっくりしてたもん。」

フィオは自分の事のように興奮しながら矢継ぎ早にセフィリアに言う。その顔はとても嬉しそうに笑っていた。

「セフィリア、体の調子はどうなんだ？」

「少しだるいだけです。プラム隊長ありがとうございます。」

「いや、気にするな。…強くなつたなセフィリア。」

そついいながらプラムもベッドに近づき、近くにある椅子に腰掛ける。フィオはベッドの端にちょこんと座った。

「この前の任務の際、途中でレンと合流したそうだな。…その時何かあったか？」

「何かって…いきなりどうしたんですか？」

「いや、あの時のレンの動きは…」

「隊長がなにかしたんですか？」

「セフィが気を失ったときに抱きかかえたのはレンだよ。すごかったんだよ。なんか瞬間移動みたいだった。」

「瞬間移動？」

セフィリアが首を傾げながらフィオに言う。

「そう…あいつは一瞬で私達の側から移動した。全く動く気配すらしなかったのに…」

「…勝者キャラル！」

一瞬辺りは静かになった。そして一気に歓声が辺りに響き渡る。みんな口々にセフィリアの事を語る。だがキャラルとダムロスは違った。二人ともレンに近寄り、ダムロスが口を開く。

「レン…いつの間にここまで来たんだ。」

それはキャラルも言おうとしていた事だったのでキャラルは口を噤んだ。そしてレンの言葉に集中した。

「別に特にたいした事じゃない。ただ走っただけ。」

「なッ！？そんなわけじゃない！！あそこから気配も音もさせないでどうやってここまで来るっていうの！！」

驚くキャラルとダムロスをよそに、レンは笑いながら答える。

「皆セフィのことに集中してただけだろ。それに気配だったら消せるし、音も同じ。ギルドにいた時だって使ってたし、そんな特別な事したわけじゃない。」

そしてレンは先ほどまで浮かべていた笑みを消し、真剣な顔にな

った。

「最近魔物の様子がおかしい。それに得体の知らない奴等も動いている。気を抜いてると死ぬぞ。」

「ッッ！?!?。」

（くッ！?何この威圧感!!耐えられない!!）（ぬうッ!?まさかここまで力を持っているとは!!）

レンがスツと威圧するのをやめると、キャロルは尻餅をつき、ダムロスは膝を地面に着きながら息を整えている。二人とも額にはうつすらと汗が見える。

「セフィリアは日々の任務の中成長している。うかうかしていると抜かれるぞ。」

レンはそう言い残し、セフィリアを抱き上げフィオ達に向かい歩き始めた。

「そんなことがあったんですか…。」

「ああ、ダムロスもキャロルもすごい疲弊していた。さつきまで別室で休んでいたしな。」

「あんなすごいやつがこんな近くにいたのかーって言うてたよ。」

「隊長の右腕にはまだまだなれそうにないですね…。でもいつか絶対になりますッ!!」

プラムはそんなセフィリアを見て、笑いながらぼんやり思った。

（レン、いい部下を持ったな。セフィリアはもっともって強くなるぞ。）

一方、そのころレンは…

傭兵をする前に世話になっていたギルドに寄っていた。

「どもー。」

「ん…、レンじゃねえか！？いきなりどうしたんだ？」

「ちょっと聞きたいことがあるんだけど…。」

そう言いながら周りに目を向ける。周りの冒険者はいきなりのレン登場にざわついている。

「おいあれって、漆黒の旅人…レンじゃねえのか？」

「あの漆黒の外套と漆黒の大剣…間違いねえ…！」

「私レンと一緒に依頼受けたいわぁー。」

「あなたと行くわけないでしょ…全く。でもかつこいいなぁー。」

あちこちで話の種になっていることに苦笑し、主人に奥で話そうと言おうとした時。

「レンじゃねえかッ…！」

後ろからどこか懐かしい声にレンが振り返る。そこには短い黒髪に燃えているような真っ赤な目の男と、長めの茶髪を後ろで纏めポニーテールにしている美人のエルフの女性の姿があった。

「グレンとアーシェじゃないか！久しぶり…！」

「全く顔ださねえーから心配したぜ。」

「でもほんと久しぶりねー。」

三人は久々の再会で少し話していたが、

「そろそろ奥に入ってくれ、仕事にならん。グレンとアーシェも一緒に入れ。」と主人に言われ、笑いながら奥に入って言った。

その光景を見ていた冒険者達は啞然としていた。そして三人が完全に奥に入って見えなくなったとき、ようやく我に返りポツリと呟いた。

「伝説級が三人も…。」

「漆黒の旅人…。」

「紅の悪魔…。」

「魔弓の麗人…。」

「それで何を聞きたいんだ？」

主人はレンに問いかける。レンは真剣な顔で主人を見つめながら言う。

「最近魔物の様子がおかしい。最近他のギルドとかで噂になっている所とかあるか？」

「やはりか。このごろ魔物の被害が多発していてどこも困ってるんだ。最近はスノーヴェルで大型の他の魔物が出たとか…。」

「なんだよレン！面白そうな話してんじゃねえーか！俺も混ぜろよ！」

「グレン…。そんな我俣言っちゃ駄目だって。」

「いいじゃねえか。なんだアーシエ、嫉妬か？」

「ッ！！違いますッ！！」

グレンは笑いながらアーシェに問いかけるが、アーシェは赤くなりながら顔を背けた。それを見ていたレンと主人は苦笑しながら二人に向かって言う。

「ほんと仲良いよなあー。」

「まあ付き合ってるし、精霊の絆も結んでるしなッ！」

アーシェを見つめながら爽やかな笑顔のグレン。アーシェはそんなグレンを見つめ返し、ほのかに赤くなっている顔で小さくコクリツと頷いた。

それから四人は近辺の街の様子や魔物の事、そしてレンが出会った神族と名乗った男の情報やら、情報交換をしていたのだった。

こんこん

「失礼します。少しお時間良いですか？」

「ん…。レンじゃないか。どうしたんだ？」

「ギルドに行つて各地の状況などを聞いてきました。やはり魔物の被害が多いみたいです。その情報の中でも、スノーヴェルに大量の魔物の出現…あの神族と名乗る奴の手がかりが掴めるかもしれない。明日スノーヴェルに出発します。」

「ずいぶんと急だな。ふむ…では第五部隊は明日から出発か。」

「いえ。今回は遠隔地ですし、セフィリア達はここに残して自分一人で行くつもりです。部隊の全員が抜けると王都周辺の治安が心配です。まして魔物の被害が増えていますしね。」

「そうか…お前には世話になりっぱなしだな。すまん。」

王はそう言つと、レンに頭を下げる。

「頭を上げて下さい。自分は自分がしたいことをやっているだけです。王様には色々我俣聞いてもらっていますし。」

「…くれぐれも気をつけて行ってくれ。お前の帰りを待ってる。」

「はっ！！では失礼します。」

レンが王の間から出るとそこにはセフィリアの姿があった。

「行ってしまうんですね…。」

「ああ…。」

あれから二人はレンの部屋に移動していた。

「レン隊長…やはり私では足手まといですか？」

セフィリアの姿はとても弱弱しく、とても副隊長と呼べる立場の人とは思えない。いまにも泣きそうな顔でレンを見上げる。

「全く、お前の泣き虫は最初から変わんないな。」

レンはセフィリアを抱き寄せ、優しく頭を撫でる。

「俺はお前を足手まといだなんて思ったことなんて一度もないぞ。いつも助かってる。それになセフィ、お前の成長はすごいぞ。キャラルだってびっくりしてたしな。」

レンはセフィリアに笑いかけながら伝える。セフィリアはレンの話をじっと聞いている。

「俺が第五部隊を任せられるのはセフィなんだ。だからセフィに託した。俺がいない間、王都周辺の安全を守ってくれるな？」

セフィリアはレンの胸の中で縮こまりながら、小さく頷いた。

…それからしばらくすると、セフィリアは試合の疲れがまだ残っていたのか寝てしまった。レンはその姿をみて微笑み、自分のベッドにセフィリアを寝かせた。

（フィオに明日出発することいっとなかないとな。）

そう思い、フィオに明日のことを伝えるために部屋を出たのだった。

朝日と共に新たな仲間

「…眠いよー。」

「朝早いから眠いのは分かるけど…」

レン達は王とセフィリア、王宮の人たちに挨拶した次の日、朝早く王宮を出て隣国のワルセイスに向かっていた。スノーヴェルに行くためにはワルセイスを通り山を越えなければならない。

「だいぶ歩いたな…。あと少しでワルセイスってところか。」

「あとちょっとで着くの？」

「ああ。もう少し頑張るか…。っとその前に。」レンは周りを見渡す。

「おい、隠れてないで出て来い。…殺すぞ？」レンは森の奥に殺気を放つ。

「あーばれちったか。やっぱレンはすげーな。」

「ごめんなさいねッ…レン。どうしてもグレンが着いてくって聞かなくて。」

森の中からグレンとアーシェの姿がでてる。二人はレン達の後をつけて追ってきていたらしい。

「着いてくなら普通に付いて来いよな…。」レンは苦笑しながらグレン達に言った。

「レンこの人達は？」フィオがレンの服をちょこちょこ引つ張りながらレンに問いかける。その様子を見ていたアーシェが気付きフィオに言う。

「自己紹介してなかったわよね。ごめんなさい。私はアーシェ。レンとは昔ギルドで会って一緒に仕事もした仲間って所ですね。それでこの赤髪で短髪の人はグレン。一応私は彼と精霊の絆を結んでいるの。」

「そーゆーこった。よろしくな嬢ちゃん。」

「私はフィオです。こちらこそよろしくお願いします。それで…精霊の絆って？」

「あれッ？フィオは知らなかったのか？精霊の絆というのは一種の契約みたいなものだよ。精霊っていうのはもちろんアーシェのよくなエルフ、天使、ドラゴンとか色々いる。その精霊と契約するこ

とが精霊の絆っていうんだ。普通は精霊同士でやることが多い。精霊達はほとんど人の目に着かないよう境界をはって生活してるからね。それで契約をしたらどうってことは特にないんだが、本当に信頼する者同士が結ぶものなんだ。」

「そうなんだ。レンありがと。」フィオはレンに笑顔で言った。

「んじゃぼちぼち行くかー。」

「そうだな。じゃあ行こう。」

レン一行はワルセイスに向かい歩いていった。

「ようやくついたか。」レンは達がワルセイスに着いたのは昼をだいぶ過ぎた頃だった。

「レンーおなかすいたしご飯食べようよー。」

「さんせー。俺もお腹すいたー。」

フィオとグレンがレンにぐったりしながら言う。

「そうだな。俺もお腹減ったし、アーシェもそれでかまわないよな。」レンはアーシェに問いかける。

「私もそれでいいわよ。」

「んじゃとりあえず街中で飯屋探すか。」

「「おかわりー!!」」フィオとグレンが大声で店員に言う。

店員は笑顔で「少々おまちくださいーい」と大きな声で言いながら

厨房に伝える。

「それでこれからどうするかだけど、グレンとアーシェはどうするんだ？」

「特に考えてないぜ。お前についていけば楽しいことがあるんじゃないかって思ってた着いてきただし。」それを聞いたレンはハアッのため息をこぼしながらアーシェを見る。

「しよ、しょうがないでしょー！！グレンはこういう性格だし、私にはとめられませんッ！！」と矢継ぎ早に言いながら頬を膨らませレンに言う。

「…じゃあ二人は俺らについてくるのか？」

「ああ、まあそーゆーこった。」「…よろしくね。」

「俺らはこれからスノーヴェルに向かうわけなんだが…各地での魔物の状況しだいでは変更つてのもありえるな。一応魔物の動向…それに携わる影を調べるために動いていく。」

「大体話は分かったけど…影って何なの？」

「あーそこはあんま話してなかったな。最近各地で魔物の動きが活発なのは知ってるよな。その関係で俺が各地を回ったんだけど、その時に会った神族と名乗るやつが気になることを言っていたんだ。この世界がジークウエルが率いる魔物の軍勢によって落ちるとかなんとか。」

「おいおい、そんなの信じてるのかよ。ありえないだろそんなの。」

「

「そうよ。大体魔物って操れるものなの?」

「わからない。だがやつの顔は真実を言っているように見えた。それで少し気になったんだ。あれだけ強いやつがどうしてそのようなことを言っているのかな。」

「レンがそこまでいうなんてな。そんなに強かったのかよ?」

「ああ、殺されかけた。」

「「ッ!?!?」」二人は目を見開いてレンを見る。二人ともレンが殺されるなんて想像もできなかったのだ。そのような力を持っているレンが殺されると言っている。レンが嘘をつくような奴ではないと二人は知っているので驚いたのだ。

そしていち早く我に返ったグレンがテーブルに身を乗り出してレンに言った。「そんな面白いことなんで早くいわねーんだよ!」

「そこは突っ込むとこ違うでしょ…。でもそんなに危ないことを調べるのに私達に話してくれないなんて…。もっと頼りにしてよねッ!」

二人はレンに向かってまくし立てるように言う。

これにはレンが苦笑しながら謝るしかなかった。

それからしばらく今後のことをみんなで話し合いが続き、とりあえずこの近辺で何かないかギルドによって決めることにした。

「んじゃそろそろいくか。フィオも疲れてるだろ？」

「…うん。なんか眠くなっちゃた。」そっぴいながらめを擦っているフィオを見ながら他の三人は笑いあった。

「ここら辺での魔物の状況を教えてもらえるか？」そうレンがギルドの主人に言う。

「誰だあんた？ギルドランクはいくつだ？」

「Sだ。」「S。」「Sです。」レン、グレン、アーシェは三人そろって主人に言う。

「ッ！？名前は！？」

「レン。」「グレン。」「アーシェといいます。」

「あの伝説の…失礼。こここのところの魔物の状況だよな。最近は町にも被害が出てきた。ギルドの連中も頑張っているが…。特に町の南の方に城があるんだが、その周りは霧がでていて町の連中が興味本位で行ったらしいんだが、結局帰ってこなかった。それを助けに行ったギルドの連中もな。だからあそこは誰も入っちゃいけないように禁止区域にしてる。」

「めっちゃめっちゃあやしいじゃねーか！！そこに行くのか？」

「…そうだな。少し気になるな。」

「でも大丈夫なの？そんな危険な場所…。」

「誰かが行つて解決しないといけない事もあるだろ？いつまでもほつといたら悪化するかもしれねーじゃん。」

「まあそうだけど…。」

「町の奴も気味悪がっているからな…。俺としても早く処理したいのだが、あいにくここら辺で活動している連中は一番レベルが高くてBだからな。」

「準備してから明日いつてみるか…。情報ありがとう。」レンはそう主人に伝えると自分達の宿泊している宿に向かうため帰った。

「…フィオ起きてたのか？」レン達が明日の準備をし終わって、宿に帰ってきた時には寝ていたはずのフィオが起きていた。

「…ぐす。なんで置いてったの…。」フィオは泣いていた。多分起きたら一人になっていたので驚いたのだろう。

「…ごめんな。フィオ疲れてるみたいだったから、ゆっくり休ませたくてな。」レンはフィオの隣に腰掛け頭を撫でながら優しく言う。

しばらくして落ち着いたフィオが口を開いた。

「どこ行ってたの？」と遠慮がちに聞いた。

「ギルドの主人にここら辺の状況を聞いてきた。明日そこへ行って見ようかなーと。」

「危ないところなの？」

「…ああ。だからフィオは「嫌だ！絶対行く！」」レンの声を遮ってフィオが言う。

「レンが危ないところに行くのに待ってるのだけは嫌なの！」フィオはまくし立てるように言い放つ。

レンは驚いたようにフィオを見ながら「はあ…。分かった分かった。でも俺から離れないことこれが条件だ。」

その言葉に「やったー！」と嬉しそうにはしゃいだ。その様子を見ながらレンは優しく微笑んでいた。

「フィオ…フィオ朝だぞ。」

「んん…。」フィオは眠そうに目を擦りながら起きる。

「そろそろ準備して。ロビーに降りてご飯にしよう。」

「んー…分かった。」

「おうレン！遅かったな！」レン達が下のロビーに降りてくると、そこにはグレンとアーシェが仲良く朝食をとっていた。

「悪いな。準備もしてたから遅くなった。」そういいながらレンとフィオはグレン達と同じテーブルに座った。

しばらく四人で作戦会議していると、レンとフィオの朝食が運ばれてきた。レン達は食べながらまた作戦会議を続けた。

「飯も食い終わったし、ちよくら探検に行っちゃおう。」とグレンがおちゃらけて言う。

「グレン…ちゃんと気を引き締めて行かないとだめだよ。」アーシェがグレンを見ながら注意する。それをグレンは「わかったわかったー。」と返した。

「やけに静かだな…。」レンがポツリと呟く。

4人はあの後すぐに森に入ってしまった。こちら辺に限らず、夜はとても暗く魔物が活発に動くため冒険者や旅人、商人などは朝方に行動する。だが城の近くでは太陽の光が雲によって遮られている。

「確かに魔物もでないのはおかしいわね…。」

「まあ城に入れば分かるだろ。」不安そうに言うアーシェとは対照的にグレンは気の抜けた返事をする。

「大丈夫かフィオ？もうすぐ着くぞ。」レンは優しくフィオに聞く。

「うん。でもちよつと怖いよ。」そういつてレンの服をギュツと掴んだ。レンは微笑みながら「大丈夫、俺がついてる。」と答えた。

「やつと着いたぜ。んじゃ開けちゃいましょうか。」グレンは勢いよく入り口である門を蹴破った。

「もー！ちゃんと開けれないの！？」アーシエはグレンに怒りながら言う。

「そんな細かいこと気にすんなって。この城すげー血の臭いがするな。もしかしたらゾンビとかホロウがでるかもなッ。」

「そんな暢気な事いつてられないかもしれないぞ…。結界が張られた。俺達を逃がさないつもりらしい。」

「えッ！？」「なにッ！？」アーシエとグレンはレンの言葉に驚き、レンを見る。それからレンは冷静に二人に伝える。「今回の親玉は手ごわいかもな…。二人ともホロウは倒せるよな？」それに對し二人はゆっくり頷く。「なら安心だ。…団体さんがお出ました。二人とも死ぬなよ。」

「ようこそ我が城へ…」その不気味な声が辺りに響く。「歓迎するぞ。」声と共にゾンビ、ホロウがいつせいに姿を現した。その中でレンはフィオに「俺の近くから離れるなよ。」と諭すように優しく伝えると、背負っている漆黒の大剣を抜き構えた。

「うおおおおおおお！！！！」その声と共にグレンの拳がゾンビの頭に命中し、ゾンビは成すすもなく絶命した。グレンの前後左右頭がグシャグシャなゾンビが無数にある。

「ぎゃあああああ！！！！」その横でアーシェが魔法で具現した弓を使い、実体のないホロウを打ち抜いていく。

「だいぶ減らしたんじゃね？」「後ちよつとね……。」お互いに背を預ける格好で二人は現状を把握する。「もうめんどくせーな。つてなわけでリミットはずしちやっていい？」「だめよ！あなたのリミットはずしたらフィオちゃんにまで影響があるでしょ！」「ちえッ……んじゃ行きますか。」グレンとアーシェは迫ってくる敵に意識を向けた。

「大丈夫か、フィオ？」レンは怖がるフィオを撫でながら優しく問いかける。

「うん。レンが守ってくれたから大丈夫。」レンの問いかけにぎこちないながらも精一杯笑顔を浮かべながら言う。

「そっか…フィオは強いな。」レンもそれを見てできるだけ不安
が取り除けるよう、笑顔を浮かべフィオに言った。

「やっと終わったぜ。ってレン！これレンが全部やったのかよ！」
グレンが見ている周りにはグレンとアーシェが相手した数よりも多
い亡骸が転がっている。遅れてやってきたアーシェは驚きのあまり
固まり、呆然としている。

「ああ。」レンは短くグレンに言う。

「どうやってホロウも相手したんだよ！」グレンは興奮している
のか声を荒げてレンに言う。

「なんかこの剣は特殊みたいなんだ…。だが俺はこの剣のことも
覚えてなくてな。」レンは申し訳なさそうにグレンに言った。「そ
れよりも先を急ごう。今回の敵は大物らしいからな。フィオもいる
から早めに終わらせたほうがいい。ここからでも相手の瘴気を感じ
られるしな。」「まあそれは俺も感じてたし賛成だ。じゃあ先に進
むか。」

「しっかしここは暗いな…。」

「そうね…。薄気味悪いわ…。」

三人はそれから奥のほうに進んでいた。先頭はレン、その後ろにレンの服をぎゅっと掴みながら恐る恐る歩いているフィオ、その後ろにグレンとアーシェという形で進んでいる。周りは薄暗く、所々に人の亡骸が転がっている。中には白骨化していない亡骸もあるので、レンは最近調査に来た冒険者かも知れないと感じていた。

「お、なんか分かれ道だぜ。レンどうするよ。」レン達の見つめる先には上に上っていく階段と、下っていく階段がある。「俺は上に行きたいんだよな」。瘴気が強いし原因はそこにあんだろ。きつと親玉はそこにいる。」グレンはいつになく真剣な顔でレンに言う。

「俺もそう思うが…。グレンはそれでいいのか？危険なのはお前も分かってるだろ？」

「ああ…。やばかったらリミットをはずす。この状態であれを相手にするにはちときついからな。」そう笑いながらレンに言った。

「…死ぬなよ。」レンは短くそう言うと階段を下っていく。

「俺が死ぬかよ。」レン達が下っていった後姿を見つめながらポツリと呟いた。「んじゃアーシエ、ちよっくら鬼退治にいきますかあー。」

「そうね。私達もいきましょ。」そう言い、二人は階段を上がっていった。

「ねえレン、グレン達大丈夫なの？なんで一緒にいかなかったの？」フィオがレンの服をぎゅっと握りながら不安そうに聞く。

「あいつらは強いから大丈夫だよ。この下に微かだけど何かの気配が感じられるんだ。その確認かな。それが終わったら応援に行こう。」それを聞いたフィオは安心したようで、レンに元気よく「うんっ！」と返事した。

「おっと、フィオちよつと下がってて。」レンは立ち止まり、フィオに言う。すると奥から魔物が出てくる。「最初に出てきた奴よりはまともな奴がでてきたな。奥にはなにがあるんだか……。まあいいや、さつさと来いよ。」レンは漆黒の大剣を構え、魔物達に言い放つ。言い終わると共に魔物達は一気に押し寄せてきた。

レンは冷静に、先頭にいる魔物を横に一閃する。先頭にいる魔物は咄嗟に反応するも、レンの大剣の方が速く魔物に入り真つ二つになる。その攻撃に怯んだのか、魔物達は少し距離をとる。「おいおい、こんなんではびびってどうするんだよ。」レンは不敵に笑いながら一気に殺気を放つ。魔物達の中には動けずに固まっているものもいれば、徐々に後退しているものもある。「ギャオオオオオオオオオオオオ！」その中から一体が錯乱したようにレンに突進する。レンはその光景を冷めた目で見ながら大剣を振り上げ、一気に振り下ろした。

「くっくく……!!!」

その一撃は魔物もろとも床を抉った。魔物はもはや原型を留めてない。辺りには魔物の肉塊が飛び散り、酷い血の臭いが周りにたちこめる。レンはその中を悠然と歩く。

「さつさと終わらずぞ。」そうぽつりと冷酷で、悪魔、いやまるで「魔王」のように笑いながら言った。

「レン達はあの気配のどこに行けたのかな。」

「行けるだろ。あのレンが着いてるんだ。心配すんなってアーシエ。」グレンとアーシエはレン達と別れてから階段を上り、先へ進んでいた。

「この扉の中にいるな。」「ええ、それにしてもすごい瘴気ね…。どうするの?」「そんなの決まってるだろ!!」

「勇者御一行ただいま参上!!」グレンは扉を開け放ちながら大声で言った。その瞬間グレンが吹っ飛ぶ。

「グレンツ!!」アーシエはグレンに駆け寄る。

「あぶねーツ!死ぬとこやったろー!」グレンは起き上がり吹き飛ばした張本人に向かって言った。そこには椅子に座って殺気を放っている人とは思えないものがどっしりと座っている。

「ほう、あれをくらって立てるとは…。」その声は低く、周りに響き渡る。「なかなかやる奴が来たようだ…。おい、二人をもてなしてやれ。」そういうと部屋の奥から影が一つ。二メートルぐらいの巨体で、四足歩行、目は三つあり、その目は赤く充血しているか

のように真っ赤に染まっている。その姿は歪な形をしており、目の間隔や腕があるところがおかしく、まるでなにかに無理矢理くっつけられたような感じた。

「おいおい…、なんだよこいつ。」

「合成獣…キメラだよ。おまえらは知らないのか。たしか天から来たとかいう奴が置いてきおった。あいつらのやりたいことは分かってるがな。」

「天からだとか…？」グレンとアーシェは一瞬考えようとしたが、魔物の主の声によって遮られた。

「お喋りはここまでだ旅の者。」そういつて手を叩いた。その瞬間魔物はものすごいスピードで二人に迫る。

「ちッー！」グレンはキメラのスピードに危険を感じたのか、アーシェを抱えながら咄嗟に飛び退く。少し遅れてグレン達がいたところをキメラの前足で叩きつけるように殴る。「ドゴッー！」床は激しい音をたてて陥没した。どうやら魔物の主が結界を張っているらしく床が抜けないようになっていいるらしい。キメラはじろりとグレン達の方へ向く。その目には意思は感じられない。

「アーシェ行けるか？」

「大丈夫よ。終わった後でじっくり説教してあげるんだから！！」

そう言いながら弓を具現化し、キメラに狙い放つ。キメラはそれに反応して素早く回避する。そのままグレンに突っ込む。

「こいつ!!」グレンはキメラに向かい構える。キメラはそのまま鋭い牙で噛み付こうと突っ込んでくる。

「うらああああ!!」グレンはそれを横にかろうじて避けながら側面を殴りつける。が、それを耐えながらキメラは太い尻尾でグレンを叩きつけ吹っ飛ばす。アーシエはすかさず魔法の矢を放つ。キメラは反応するも、流石に全てはかわせなかったのか所々流血している。

「ぐッ」。壁に叩きつけられたグレンはよろよろと立ち上がる。「クソツタレえ」。やりやがったなッ!!」グレンはポキポキと骨を鳴らしながら叫ぶ。明らかに以前と雰囲気が違う。紅かった目は瞳孔が開き、そして殺気を垂れ流しながらキメラを睨みつける。「アーシエ、わりいな。ちつと解放するぞ。」「私は大丈夫だよ。グレンに一生ついていくって言ったでしょ。」「そういいながらグレンに優しく微笑んだ。

「ぎゃおおおおおお!!」凄まじい咆哮、それと共に合成獣がグレンに迫る。

「ナメんなよおお!!」グレンも合成獣に向かって走り出す。合成獣はグレンに向かい飛び掛る。グレンはそれが見えてるのに

も関わらず走り続ける。合成獣がグレンの顔に噛み付く寸前、グレンが消えた。

「ほおッ…。」魔物の主は興味深そうにグレン達を見つめる。

「ギイ!？」合成獣はグレンに気付いたのか声をあげる。その時にはもう遅く、グレンの拳が合成獣の横っ面にめり込む。合成獣は成すすべもなく吹っ飛ばされ壁に激突する。そこをアーシェの弓から無数に放たれた魔法の矢が突き刺さる。

グレンとアーシェは合成獣の方を向いた。そこには至る所から血を流し、血だまりを作っていた。

「ハーハッハッハッ!!!」急に笑い出す魔物の主。

「次はお前だ。」グレンは魔物の主に指を指しながら威圧する様に言い放つ。

「ようやく我を楽しませてくれる様な奴が現れたか…。」魔物の主は邪悪な笑みを浮かべながら二人を見つめる。

「うるせー…、消える。」グレンは魔物の横に素早く走りこみ、拳を叩き込もうとした。「ぐうッ!!」だがグレンの拳は何かに阻まれ、逆に魔物の手から放たれた魔法弾を至近距離から放たれ直撃する。「ぐうううッ…。」それをなんとか手をクロスさせ防ぐが、

アーシェの所まで押し戻された。

「急ぐな、急ぐな。どうせ死ぬんだ。今生きてること精一杯感じておけ。」

「ちょーしにの…ッ!?!?」「きゃッ!?!?」「いきなり瘴気、殺気とも魔物から溢れる様に出る。それによりグレン、アーシェ共に驚く。」

「さあ…地獄をみしてあげよう。いくぞおおおお!?!?!?!?!」

「ゴオオオオオ...」

「きゃッ!？」突然の揺れとともにくる圧迫感、その違和感を感じてフィオ驚き叫んだ。

周りには無数の亡骸、そのなかで血濡れのレンは大剣についた血を払いながら呟く。「上でなにかあったな...。ちっと急ぐか。フィオ走れるか？」フィオはレンの言葉に頷き、レンのもとへ走り寄る。

「じゃあ行くぞ。」「うんッ!」そして二人は奥へ走っていった。

二人は奥まで走りきった先には人骨と思われるような骨の山があった。レンはフィオが震えてるのが握られている服の裾から感じ取れた。「フィオ…俺がついてる。」そう言いながらレンはフィオの頭を撫でた。フィオはばつとレンの顔を見上げた。そこには笑いかけるレンの姿があった。それにより震えは止まり、更に力を入れギョツと裾を掴んで小さくレンに「ありがとッ。」と答えた。

「誰かいるのか…？助けてくれ…。」人骨の山の奥からかすかに声がするのを二人は確かに聞こえた。二人はすぐさまその声のする方に駆け寄る。すると臨戦態勢の女性が細めの剣、レイピアを突き出し威嚇していた。その奥には重症の男性が二人、その人達を必死に治療してる女性がいた。

「どうした？俺らはギルドで依頼を受けてきたんだが。」「わ…私達は助かったのか…。」威嚇している女性は震える声でそう問いかける。よく見ると彼女が持っているレイピアも震えてるのが見て分かる。「ああ…。大丈夫だ。そっちの男は平気なのか？見るからに重症だろ。」「そう言いながら男二人に駆け寄る。二人とも血だらけで息もかすかにしているだけで、もういつ死んでもおかしくない

状態だった。治癒している女性はかなりの時間回復魔法を使い続けているのか、酷く汗をかいていて疲れきっている状態だった。

（これはもうもたないかも知れないな…。）レンは率直にそう思った。「ねえ…レン大丈夫なの？」レンの後ろにちよこんと座りながらレンに聞いた。そこでレンは思いつく。「フィオ…お前が治癒してやれ。」レンの予想外の言葉に驚く。「できないよッ！そんなこと！」レンはおろおろしているフィオの肩を掴み、向き直らせ、しっかりとフィオの目を見つめながら言う。「フィオならできる。俺を信じろ。」フィオはしばらくレンの目を見つめ、決心したように微かに頷いた。

「フィオ、目の前の人達に集中して傷を治したいって想うんだ。その想いが魔法になる。」「うん。分かった。」フィオは目を閉じ集中する。（この人達を助けたいの！お願い！）するとフィオの手から優しい光が現れる。（これで平気だな…。でも魔法の使い方なんか俺が知るわけないのに…。なんでだ？）

レンが考え込もうとしたとき、女戦士の言葉に遮られる。「む…無詠唱だと…。信じられない…。」「詳しい説明は後にしましょ…。まずはここから出ないと…。」「治癒していた女性が疲労の色を滲ませながら言う。「そうだな。まずは脱出だな。あんた男の人担げるか？」「あ…ああ。問題ない。」「とりあえず地下から出口まで行こう。問題は結界だな…。」「そう呟いた。

「くそッ！！化物がああ！」グレンは魔物の主に流れるように拳蹴りを放つが素早い動きでかわされ、時には防御される。そこにアーシェの放った弓が当たる。だが弓が突き刺さることはなく、なにか不可視の壁があるようにはじかれる。魔物の主はグレンの一瞬の隙をみて右足を魔力で強化しての蹴りを放つ。「グッッッ！？」グレンはかろうじて防御したが吹っ飛ばされ壁に激突した。魔物の主は続けて魔力玉をいくつか作り出し、グレンとアーシェに放つ。「ツッッ！！？」アーシェは避けようと試みるが数が多すぎて避けられなかった。

「クックックック…。これまでかのー。」

「アーシェ…、大丈夫か？」体中から出血し、息も絶え絶えになりながらグレンはアーシェに尋ねるが、反応がない。アーシェは体

中から出血し、気絶しているのが見て分かる。(まじでやばいぞ、ここで俺が完全解放したらアーシェが…、クソッ!! チェックメイトかよッ!!) グレンは忌まわしげに魔物を睨みつける。

「そんなに睨むでない…。安心しろ、二人ともあの世に行かしてやる。」そう言つと魔力で創つた二つの槍を両手に持つ。「ではサラバだ、旅の者。楽しかったぞ。」そう言いながら槍を放った。

(やベツ! まにあわねえ!!) グレンはアーシェのもとに駆け寄ろうとするが、放たれた槍のほうが速い。「アーシェエエツツ!!…!!」グレンはアーシェにあらん限り手を伸ばすが、その思いは届かず槍が命中し…

…ていなかった。「大丈夫かグレン?」「レンツ!?」「アーシェの前に立ちほだかり、大剣で槍を防御していた。「よッ…。っかおまえボロボロじゃん。」「ッ! 完全解放してたらこんなやつ!!」「お前が完全解放したらアーシェもフィオも被害を被るだろうが。」「ちッ! まあなんにせよ助かった。ありがとな。」「ああ、下でフィオ達が待つてる。アーシェをつれて早く行け。あいつの相手は俺がする。」

「わりい……。気をつけろよ。」そういいながらアーシェを担ぎ、部屋を出て行く。

「待たせたな。」

「よいよい、どうせあの者どもは逃げられないんだ。あとでじっくり殺してやる。」

「それなら大丈夫だ。」そう言いながら手に持っていた大剣を魔物の主に向けながら「俺があんたを殺すからよ。」と冷たい笑みを浮かべた。

「グレン、アーシェー！」フィオはアーシェを抱え、フラフラと歩いてくるグレンを見かけると大声で叫び駆け寄る。

「…よう。ちつと休憩していいか？」グレンは血だらけのまま座り込んだ。

「ちよつと待ってつて。アーシェが終わったら次はグレンねッ！」
そういいながらアーシェの治療にかかる。「おい…魔法つかえるのかよ！」グレンは驚いた顔でフィオを見つめる。「うん。さつきレに教わったんだ。」（おいおい…無詠唱を一瞬で覚えるんかよ。流石レンの連れだな。）ぼんやりとそんな事を考えながら意識を手放した。

「おいおいどうした。そんなものか…。我を失望させるな。」そう言いながら魔物は魔法弾を放つ。

「ちいいいッ！！！」初撃を大剣で切り裂き、次の魔法弾を紙一重でかわす。

魔物とレンが激闘している所は部屋としての面影はなく、破壊しつくされていた。それでも崩壊しないのは魔物の結界があるからであろう。

魔物は高らかに笑いながら魔法弾を生成している。対象的にレンは息を切らしながら魔物を睨んでいる。（あいつ隙がねえ…。隙を伺うために回避してたが待ってたらこつちがやられるのは目に見えている。それならこつちから仕掛けるか。）レンはこの状況を冷静に分析していた。

そして行動に移す。レンは魔物の横まで素早く移動、大剣で魔物をなぎ払う。が、魔物の不可視の壁により防がれた。

「凄い速さじゃな…。だがこのバリアを何とかしないとなああああああ！！」魔力のこもった蹴りが放たれる。（かわしきれねえ！？）

魔物の蹴りがレンの腹にめり込む。

「グはツツ！！！」

レンは凄いい勢いで壁まで吹き飛ばされ、叩きつけられる。レンは口から血を吐き出し、頭からもおびただしい量の血が流れ出す。

（やっべえー…。つえーな…。）ふらふらと立ち上がる。

「ほう…。我の全力の蹴りをくらっても立てるとは…。なかなかやるではないか。」「がほ…。なるー、つえーじゃねーかよ。」「レンは血を吐き出しながら、魔物を睨み言う。「言うではないか小僧。」「そう言いながら、魔法弾を創りだす。そしてレンに向かい放つ。」

レンはかろうじてそれを避ける。「遅くなってるのではないか？」「ツツツ！！？」「レンの目の前には魔物の姿があり、蹴りが顔面を捉えた。」

「ツツ！！！」

続けざまに拳、蹴りとレンに放たれる。

「…これで終わりだな。」

嵐のような攻撃が終わった時、そこには血まみれのレンの姿があるだけだった。

「よし。みんな治癒し終えた。」フィオは汗を拭きながら呟く。

「大丈夫か？ずっと治癒し続けたじゃないか。」助けた女性の一人がフィオに言う。その横に疲れきって寝てしまった、女性が隣にいる。

「大丈夫だよ。これからレンを助けに行く。」「馬鹿かッ！？あの殺気がわからないのか！？」「でも…。」

「ッッッ！…！」

二人にいきなり襲い掛かる圧力。それだけで二人は大量の汗をかき、へたり込む。

「こッ殺される…。」「ううう…。」

二人はそこで気を失った。

（俺は死んだのか？くっ…頭がいてえ…。）

「レンー…はーやーくー！」

「遊ぼうよ！レン！」

「レンー！とーうっ…！」

「グハッ！？…いきなり抱きついてくるな！ちびっこども！」俺と戯れている子供達。なんか楽しそうだ。みんなでわいわい遊んでいる風景が見える。

（なんだ…？俺はこの光景に見覚えが…、くっ！？なんなんだこの頭痛は…！）

「レン様、おはようございます。朝食ができていますよ。」だれかは分からないがとても美人な人が俺を起こそうと体を揺さぶっている。

「んあー…、おはようイリア。もう朝か…。」

（イリア…。どこかで…。ぐうッ…思い出そうとすると頭がぁ…割れるう…。）

「さあ、行きましょう。今日もいい天気ですよ。」そう言いながら俺に向かって、まるで太陽のように微笑んだ。

「おお！！レンじゃねーか！」「おまえその馴れ馴れしい言葉遣い直せよな。レン様こんにちは。」最初の男性はいかにも軽そうな感じの雰囲気醸し出してるが、その両手には剣、いわゆる双剣が握られている。もう一人はいかにも厳格という言葉が当てはまるような男性だ。その手には自分の身長くらいありそうな長刀を持っている。

「おう、クロスにブライト。鍛錬頑張ってるなー。それとブライト、クロスみたいに碎けた感じでいいっての。」そう言つと長剣を持っている男性の肩を叩く。「そんな…、魔族を束ねる長ですよ！？無理です！」焦りながら俺に言う。「レンが言ってたんだからいいじゃん。」「お前はー…。」ブライトはクロスを見ながら頭を抱える。それを見ながら俺が笑っている。

（さっきからなんなんだ…。これは俺の記憶なの…か…？グガァ…、さっきから痛みが増し…て…。）

「俺らの方が圧倒的に人数が多いんだ！！殺しちまえ！！」敵の親玉らしき男性が大声で叫ぶ。

「俺とブライトで雑魚を潰して、レンとイリアの道をこじ開けるんねー。」クロスがふざけながらレン、イリア、ブライトに言う。
「そうだな。さっさと蹴散らすか。」「レン様には指一本触れさせませんから。」

「お前らは手を出さなくていい。」

「コッツツツツ！！！！？？」

（レン様がキレた…。それにしてもすごい殺気、意識を保つのに精一杯…。）

（まじですげー殺気。さすがレンだぜ。）

（グッ…。すごい…。この殺気。）

俺の髪と瞳は黒から紅に変化し、瞳は瞳孔が開ききり、具現化した魔力が俺の周りを漂う。それからは一方的な殺戮が始まる。

（これが俺…。なのか…。？ガアッ！！急に痛みが…。グウッ…。ガ

長い沈黙の中、最初に動いたのはレンだった。だがそのスピードは遅い、だが一歩一歩着実に魔物に近づく。顔は俯いていて良く分からぬが、危険と判断したのか魔物は下がりながら魔法の槍を創る。

その間もゆっくり魔物へ近づくとレン。そのレンに対して、魔物は創った魔法の槍を放つ。魔法の槍はレンに向かう。

「…。」「何ッ…!?」魔物はレンに直撃だと思っていたが、レンにあたる直前槍は消失し消え去った。(なぜ魔法が消失した!?)魔物が驚いている間も、レンはゆっくり近づく。魔物は無意識にあらずさる。「バチバチイ!」「くッ!」だが結界らしきものがそれを許さない。(これはこいつが創ったのか!?)魔物は本能で魔法球をいくつも創りだす。(こいつは危険だ!ここで殺さなくては!-)そしていっせいにレンに放つ。「なッ」。レンは魔法球を物ともせず、魔物の前まで移動していた。そして初めて下を向いていた顔を上げる。レンの顔は瞳が紅に染まり、瞳孔が開いている。それに一番目を引くのは口元、まるで目の前の敵を待ち望んでいたかのように笑っているが、すごく冷たい笑みを浮かべている。

そして無慈悲に大剣を振るう。その大剣は魔物を守るバリアもろとも切り裂いた。魔物は言葉を発する暇もなく絶命した。

「ククク…、ハッハッハッ…!!」レンは笑った。なぜだか分からないが、気分が高揚していた。記憶喪失で失ったものを取り戻

せたかのように。

「ん…。」フィオは目を覚まし、目を擦りながら周りを見渡す。
他の人達はまだ寝ている。

「レンはどこ？」きよろきよると周りを見たが、どこにもレンはいない。

すると誰かがこつちへ歩いてくる気配を感じた。その方向を見ると血塗れのレンが歩いてくるのが見えた。「レンッ！！？」フィオは急いでレンに駆け寄る。「レン大丈夫なのッ！？」「ああ…大丈夫だ。みんなは大丈夫か？」「大丈夫みたいだよ。それよりレンだ

よ！って傷がないじゃん！」「ああなんか勝手に塞がった。まあきにすんな。」「そういつて他の人のもとへ歩く。」「おら、起きろ。」「そういいながらグレンを軽く蹴飛ばす。」「ぐはッ！？ってレン！お前もつと優しく起こせないのか！？」「レン、お前その目どうした？」「グレンはレンを見つめながら驚く。レンの瞳は紅に染まっていた。瞳孔は開いていないが、真っ赤になっている。

「これは…、まあいいだろ。」「まあいいだろって、なんか雰囲気も違うだろ。纏ってる気も違うし。」「グレンは真剣な顔で問います。

「わりい…、話すにはもうちょっと待ってくれ。」「そうぶっきらぼうに言った。そして助けた人達を指差し、「まずはこいつらつれて帰ろうぜ。それから飯だ。」「とフィオとグレンに微笑み、言うのであった。

「しっかし、すっかり日が暮れたなあー!」辺りにはもう日の光がなく、闇に覆われている。

「ほんとにあの城をでれたのか…。助かったのか?」女剣士のトルチエが呟く。

「何言ってるんだよ。生きてるに決まってる!ってかさっきから何回いってんだよ!」トルチエに向かってグレンが笑いながら言う。

「笑うことないじゃないか!あんな場所から出れるなんて思っていなかったんだ!」二人がアーシェと魔法使いの男、フォールを背負いながらぎゃあぎゃあ騒ぎ出す。

「お前らは静かに歩けないのか?」もう一人の怪我人である剣士風の男、ボルグを背負いながらレンはため息を吐く。

「あははは…。申し訳ないです。でもほんとに夢みたいですよ、あんな恐ろしいところから出れたなんて…。ほんとにありがとうございます。」治癒士のポミーがレンに言う。

「俺らもお前らを助けにあそこに行ったわけじゃない。感謝する必要はない。」「す…すみません。」「レンの言葉にしゅんとしながら小さい声で言うポミー。

「レンは謝って欲しいわけじゃないと思うよ。あんまし危ないこととして欲しくないんだって。ねえーレン!」フィオはレンの顔を覗

き込みながら言う。レンはそれには何も答えず、黙々と街に向かって歩くのだった。

「おっ…おまえら帰ってきたのか!？」ギルドの主人は目を見開き、驚きながら言う。「とりあえずこいつらの面倒を見てくれ。」レンは背負ってたボルグをベッドに寝かせながら主人に言った。「わっ分かった。」そう短く言うのと街の治癒士を呼びに行行った。

「つーかおまえらも無謀な事したなー。ギルドランクいくつなんだよ?」グレンは適当にある椅子にどっしりと座り、笑いながらトルチェに話しかける。

「私達のなかではボルグがAクラス、他はBクラスだ。」グレンの問いかけにトルチェはぶっきらぼうに答える。

「ほー。なかなかやるじゃん。だが自分達の力量を考えないとなー。危険だと感じたら逃げる勇気も必要だぞ。」グレンはおちやらかながらトルチェ達に言う。

「そんな事は分かっている！」トルチェはグレンに対して怒鳴るが「ほんとにわかってるのか？」すぐに怒りが恐怖に変わる。一瞬にして空気が重苦しくなり、トルチェはへたり込み、大粒の汗を額に滲ませている。「おい、そこまでにしるグレン。」パアンッ！！レンはグレンの頭を軽く叩きながら言った。「いってー。」グレンは涙目になりながら、レンを睨む。

「あ…あなた達は一体…。」トルチェが消え入りそうな声で呟いた。「ん…、俺らのこと知らなかったの？俺は紅い悪魔って呼ばれてるけど。」

「ッ！！？」二人は共に驚いた。

（Sクラスの人だったなんて！？）（確かに次元は違うのは分かっていたけどあの伝説級だったなんて！？）

「っーか腹減ったーレン。」うるさい。少しは黙ってる。」（こんな人が伝説級??）二人はギルドのマスターが治癒士を連れてくるまで困惑していたのだった。

「ふー…くったくった。」「お前どんだけ食うんだよ。」「お腹に手を当てて満足そうな顔をして言うグレンにレンは頭を抱えながら言った。

「でもすごい食べっぷりだったねー。」「フィオは笑顔でグレンに言う。「そうだろそうだろ。フィオもいっぱい食べないと大きくならないぞー。」「グレンはフィオに真剣な顔を向けながら言った。

「そうなの！？じゃあいっぱい食べるよ！」「フィオ…無理して食わなくてもいいんだからな。グレンの言うことは話半分に聞かなくちゃだめだ。」「ちょッ！！レンひどいぞ！！」「レンとフィオは笑い出す。しばらく三人でわいわいしながら時間がすぎた。

「んじゃ俺はアーシェのところに泊まってくからまた明日だな。」「三人は店を出てどうするかを決めようとした時、グレンがいった。

「そつかじゃあ明日ギルドの前で待ち合わせだな。時間は…10時ごろでいいだろ?」「おう、わかった。んじやな!」「グレンはすぐに反転し、走り去っていった。

「それにしてもすぐ回復して良かったね、アーシエ、ボルグとフオールだっけ。」「ああ、そうだな。」「ぼんやりとあの後の事を思い浮かべる。

ギルドの主人が呼んでくれた治癒士がすぐに治癒したおかげで三人とも意識を取り戻した。グレンはアーシエを抱きしめ、それにより顔を真っ赤にしながらグレンの胸をぽかぽかと駄々っ子のように叩いていた。まあ恥ずかしかったんだろう。あのチームはトルチェとポミーが泣きながら、ボルグとフオールに抱きついていていた。

二人は困っていた様子で「悪かったな。」「とか「ごめんな。」「など謝罪しながらあやしていた。フィオも俺の横で袖を握り締めながら「本当に良かった。」「と呟きながら泣いていた。嬉し泣きってところだな。

「…ン、レーーーン!!」「おうツ!?!」「フィオはレンの顔を覗きながら精一杯大きな声で呼びかけレンを呼び戻した。レンは驚いたのは言うまでもない。

「どうした、フィオ?」「どうしたじゃないよ、早く宿にかえろーよ。」「フィオは頬を膨らませながらレンに言った。」「そうだな。行こうか。」「レンはフィオの頭をぽんぽんと軽く撫でると歩き出す。隣を見ると「へへッ。」「と少し赤みがかった笑顔をレンに向けながら、レンの隣を歩いていくのだった。

氷山の守り神―1―

「準備できたか？」「ちよつと待つてレン！」フィオはドタバタしながら走ってきた。その様子を見てレンはクスクス笑いながら「そんな急がなくてもいいんだぞ？忘れ物はないか？」と優しく問いかける。

フィオは鞆を降ろして中身をチェックして、忘れ物をないのを確認すると「大丈夫！」と元気よくレンに答えた。「じゃあグレン達と合流しに行こう。」二人は宿を後にした。

「あ、グレン！アーシエ！」フィオは大きく手を振りながらグレンとアーシエのもとへ走る。

「フィオちゃん！」アーシエは手を振り返した。そしてフィオはアーシエに抱きついた。アーシエも笑顔でそれに応じていた。そんな中、歩いていたレンが遅れてついた。

「アーシエ無事で良かったな。」「うん…、ってレンその瞳はど

うしたの？雰囲気もなんか違うし。」「ああ、これは色々あってな。」「少しして整理がついたら話してくれるってレンが言ってたし、あんま気にしないでいいんじゃない？」「グレンがレンのフォロ―をしながら「出発するんだろ？次はどこに行くんだよ？」とレンに問いかけた。」「そうだな。ギルドによって主人に話を聞いてみてから決めよう。

「おうレンじゃねーか。昨日はありがとよ。街の人も感謝してるぜ。」「ギルドに入ってから主人を探していると、後ろから主人に声をかけられた。

「いや、俺たちも主人の迅速な対応は助かった。ありがとう。」「ありがとうございます。」「レンとアーシエは主人に対し礼をしながら頭を下げた。」「よせよせ、あれは俺の仕事だ。んで今日はどうしたんだ？」「主人がレン達に問いかける。」「ああ、魔物の情報なんだが、なんか知ってるか？」「主人は少し考え「北のアイスグランに魔物が街に出たとか。」「アイスグランか。ありがとう。」「それを聞いた後、レンは出口に向かい歩き始める。

「サンキューおっちゃん！」「ありがとうございました。」「ありがとー。」「グレンは主人に笑いながら、アーシエはペコリとお辞儀をしながら、フィオは手を振りながらレンの後に続くこうとするが「おいッ！これを持ってけ。」「主人が袋を一番最後のフィオに投げる。」「これは？」「フィオがうまくキャッチしてから主人に問う。」「今回の報酬だ。持っていてくれ。」「ありがとー。」「フィオは笑顔で主人にいいながら、レン達の後を追った。

「んでどうするんだ。結構遠いぞレン。」グレンはこれからの事をレンに問う。「あー、船で行く。」「ええッ!？」「あーそう。」

グレンはふつーに返すが、フィオとアーシェはすごく驚いた。「んじゃ、いくか。」「船とかはじめてだー。」「船のチケットとかはどうするんですか!？」「フィオは初めての船ということぞわわしているが、アーシェはひどくまともなことをレンに言う。」「多分大丈夫。」「そーいい、レンは目的の場所に歩き始めた。」

「船のチケット四枚あるか？」レンは船員に聞く。

「あーもうチケット一枚しかないんだ。」「ええー！じゃあ四人で船乗れないじゃん！」フィオは頬を膨らませながら言う。「んーじゃあここでお別れだなフィオ、グレン、アーシェ。」「はあ！？」「なんで！？」「ええー！？」レンは悲しそうにみせながら言う。

その問いかけに対し三人はレンをみながら不満を爆発させる。それから最初に口火をきつたのはグレン「わざとらしく悲しそうにすんな！ってかなんで別れるんだよ！」「いやだつてもともととお前ら勝手についてきただけじゃん。」「レンと一緒にじゃないのー！？」「しょうがないだろ。一枚しかないんだし。グレン達と後でこいよ。」「なんでみんなで一緒に行かないの？」「ちよつと考えたいことがあるだ。まあ情報収集もしくからよ。」「皆の問いかけに答え終わり」「じゃあ行ってくる。」「と手を軽く振りながら船へと向かった。

「しゃーない。俺らは明日の船で行くか。」「そうね。チケットだけ買っていきましょう。」「ぶーぶー。」「…拗ねないの、フィオ。」「グレンは一人でチケットを買いに歩いていき、アーシェは拗ねているフィオをあやしなから待っているのであつた。

「まもなく出航します。」船が出港し、アイスグランに向かう。
レンは自分の部屋のなかで考え事をしていた。（これまでの俺は魔力なんて感知できなかった。だがあの戦いの後からなぜか感知できる。それに…。）自分の手のひらを見る。

レンの手の中には黒い炎の塊があった。それを握りつぶし、ベッドに寝転がる。（俺って一体何者なんだ？この前の頭痛の時思い出せそうだったんだが…。まあ分からない事を考えても仕方ないか。

（レンは考えるのをやめ、目を閉じた。

「間もなくアイスグランに到着します。お客様は降りる準備をしてお待ちください。」船内にアナウンスの音が響き渡る。

「んー…。」レンはベッドから上体を起こし、気だるそうに目を擦りながら背伸びをする。「よし、降りる準備だな。」そう呟くと自分の荷物をまとめ始めた。

しばらくするとまたアナウンスの音が船内に響き渡る。「船の長旅お疲れ様でした。目的地アイスグランに到着しました。」レンは自分の荷物を持ち、船外に出る。

「雪か…。」外ではすっかり日が暮れていて、雪が降っていた。そこから街の様子を見ると辺り一面雪が降り積もり銀世界になっていた。レンは宿を探すため足早にその銀世界に踏み込んだ。

「すまんがこちら辺に魔物がでたと聞いたのだが…。」レンはギルドの主人に問う。あの後レンは適当な宿をとった後、ギルドに情報収集にきていた。

「ああ、普段はあの雪山にいるんだが、最近街にも現れ始めたんだ。今常駐している騎士と、こちらで協力してるんだがこんな辺境の街だ、なかなか人がいなくて手を焼いているんだ。」そういいながらレンをまじまじとみた主人は「あんたその剣、まさか…レンか？」「ああ。」すると主人はレンの手を勢いよく握りながら「手伝ってくれ！頼む！」と真剣な表情で頼み込んだ。

「もとからそのつもりだ。」レンは主人に力強く伝える。「助かる。ありがとう。…だがうちらは街の防衛で精一杯なんだ。せめて国から騎士が早く来れば出せるんだが…すまん。」主人はレンに頭を下げる。

「いや、問題ない。明日仲間が到着するはずだ。話を聞けてよかった。ありがとう。」そう伝えるとレンはギルドを後にした。

（ん…。これがアイスグランを救ったといわれる銀狼か。）レンは宿に戻る途中少し寄り道をしていた。この大きな銀狼の銅像を見るため。

その昔アイスグランに魔物が現れた。その魔物はとても凶暴で街の人々を襲った。男、女、子供皆殺しは当たり前。街も魔物に対抗したが、傭兵、騎士ともに少なく対抗できなかったそうだ。人々が

絶望に包まれた時に現れたのが銀狼だった。その銀狼は魔物と戦い、長い戦闘の末その魔物を噛み殺し山に戻ったという話がある。今もあの山に住んでるかどうかも分からないが…。

（いたとしたら今どうしてるんだろうな…。）そんなことを考えながら宿に向かい足を進めた。

（…血のにおい？）レンは立ち止まり辺りを見渡す。周りには暗闇が広がり静まり返っている。だがレンはその微かな血のにおいを頼りに探す。

（…ここか？）レンは路地裏を覗き込む。するとそこには血濡れの女性が倒れていた。レンは辺りの気配を感じながら進む。どうやら周りにはなにもいないようだった。レンは女性を抱え上げながら状態を見る。女性は腹部に何か鋭利なもので刺された傷が見受けられるが、深くはなく命に別状はないようだ。ただ意識はなく酷く衰弱している。

「おい、大丈夫か？」レンは声をかけるが反応はない。レンは応急処置を済まし、女性を抱え直すと自分の宿に駆けていった。

「ん…。」女性は目を擦りながらぼーっとしながらあたりを見渡す。そして徐々に昨日のことを思い出し、自分の体を確認する。そこには包帯が巻かれており傷口の手当てがしてあった。何がなんだか分からず呆然としてるその時、扉が開いた。女性は咄嗟に動ける体勢になりつつ扉を見つめる。

「起きたのか？体の具合はどうだ？」扉から入ってきたのはレンだった。その手には朝食が二つ。「お前が助けてくれたのか？」近づくとレンに向かって問いかける。「ああ、それにしてもどうしたんだ？傷だらけだったぞ？」女性の前に朝食を置く。「…すまない。」女性は俯きながらそう呟いた。それをきいたレンは頭をかきながら「まあいい、飯くつとけ。」レンは自分の分の朝食を食い始める。それを見た女性は自分の前に置かれた朝食を食べ始めた。

「世話になった。ありがとう。」朝食を食べ終えた女性は立ち上がり言う。「行くのか？」「やらなきゃいけないことがあるんだ。」「そうか。じゃあまたな。」レンはそっけなく返す、すると女性は一礼しながら出てった。

（あいつ何処に行くんだ？）レンはあの女性の後をつけていた。あのとときに女性の鬼気迫る顔を見たとき、何か裏があるとレンは確信していた。そのあと気配を消しながら後を追っているのだが、その先にはあの雪山がそびえたっている。（おいおい、雪山入るとかないよな。）レンの考えてることは的中した。女性は雪山の麓に着くと中に入り始めた。（チッ！めんどくさいことになりそうだな…。）レンは気配を消して後を追いつつ始めた。

「後追っかけたのはいいんだけど…やっぱめんどくさいことになったよなー。」レンは一人呟く。周りには魔物の群れ。「結局あいつも見失ったし。…潰すか。」ニヤリと笑う。そして背中にあつた大剣を抜き構えた。

その頃船の上では…。

「早くレンに会いたいー！！会いたいー！！」手足をばたばたしながらグレンとアーシェに言う。グレンとアーシェは苦笑いを浮かべる。二人とも心の中で（早く着いてくれー。）と思っていた。

氷山の守り神―3―

周りには魔物の死体の数々、真っ白な雪の上に紅い華が咲いていた。

「ちッ！数が多すぎるっつての。」レンは大剣を横になぎ払い魔物を蹴散らす、レンの体にも無数の傷痕があり、血で真っ赤にまわっていた。

（足場も悪い、数は多い…最悪な展開だな。）

流石に雪山に住むだけあってレンよりも機敏に動き、連携しながら襲い掛かる。「うぜーんだよッ！！」その咆哮と共に大剣を振るい魔物を斬り殺したが、その後ろからレンに向かって飛び掛ってくる魔物がいた。（やばッ！回避できねーぞ！）レンは飛び掛ってくる魔物を見据えていた。

「なんか胸がざわわする。なんだろう?」「どうしたんだ。」
胸を押さえているフィオにグレンが問いかける。「よくわからないけど…」頭をかしげ、うーんと唸っている。

(まあほつといても大丈夫だろ。)

「ただいまー。ってグレン、フィオどうしたの?」甲板に出ていたアーシエが部屋に帰ってきたが、頭をかしげ唸っているフィオをみてグレンにいう。

「わーからん。」手をひらひらさせながら部屋をでる。

「どうしたのフィオ?なんかあった?」アーシエはフィオの顔を覗きこみながら聞く。

「よくわかんない…。けどねなんかここの辺りがもやもやするの。」
フィオは胸を押さえながら考える。

「そっか…私はなんとなくわかるよ。」アーシエは窓際に歩きながらフィオに言う。

「この前精霊の絆のこと話したでしょ。だから互いのことわかるの。なんていうかなあ…以心伝心。お互いをお互いが認め合い、想いあつてれば相手の事が分かったりするんじゃないかな。」
「んー難しくて分かんないよー。」「ふふふ。そうかもね。もうちょつと大きくなつたら分かるかもね。」
アーシエは微笑みながらフィオを見つめる。

そのとき「間も無くアイスグランに到着します。お客様は降りる準備をしてください。」アナウンスの声が船内に響き渡る。

しばらくして「だってよ。準備すつぞ。」部屋の扉を開けグレンはアーシエとフィオに言った。

レンは状況を冷静に分析していた。ある程度の怪我は覚悟して魔物の動きを見ていたが、飛び掛ってくる魔物の豪腕にあたる直前、白銀の何かが横切った。その後を目で追うと、そこには魔物を喰いちぎっている銀狼の姿が。銀狼は俺を一瞬見つめ、すぐ魔物の群れの中に突っ込んでいった。

（仲間なのか？まあいい助かったし。敵に向かっていったところからして敵ではなさそうだ。）そう分析し、銀狼の後を続いた。

銀狼は正面から魔物を蹴散らし、そのフォローをレンがする。だが魔物の大半が息途絶えたとき変化が起こった。銀狼の動きが著しく悪くなる。どうやら怪我をしているみたいだった。

（これは少し雲行きが悪くなったなあー。足場も悪いし。）そう思いつつ銀狼にむかって「俺が前にでるから下がれ！」魔物を斬り殺しながら叫ぶ。だが銀狼は構わず突っ込む。「このバカ！下がれって言うてんだろ！」レンは群れに突っ込む銀狼をみて怒鳴り、そ

の後を急いで追いかける。

銀狼は三体の魔物を前足でなぎ払い、最後の魔物を見ようと振り返ると、すでに魔物の姿はなく「バカ！後ろだ！」銀狼はレンの言葉で飛び退くが、すでに魔物は口から氷柱を吐き出していた。

（間に合ってくれ！）レンは銀狼の前に飛び込む。そしてレンの脇腹に突き刺さる。辺りに血の花をさかせ、レンは意識を失った。

「まさかレンが先に目的地である山にむかっているととはなあー。」
グレンはぼそつと呟く。後ろでフィオが「今から行くー！」と駄々をこね、その横でアーシェが必死になだめていた。

あれから街に入り聞き込みをしていたところ、すぐに情報が入ってきた。ギルドでは「漆黒の旅人」有名だったし、なにより漆黒の外套と身の丈以上の大剣を持っているレンだ。はつきりいつて目立つ。以上に目立つ。

その情報の足取りを追ってレンの行方を掴んだのはいいが、辺りはすっかり暗くなっていた。「これは明日じゃないとまずいな。」と

りあえず明日レンの後を追おう。夜になると魔物も動き出すからな。」「グレンはアーシェとフィオに言う。フィオは「ぶーぶー。」「と頬を膨らませ抗議するが、夜になると魔物の多くが動き出すことを知ってるのではないっというところだ。その隣でアーシェは苦笑いを浮かべていた。

そうして三人は宿を探しに街の中を歩き始めた。

「つつ！これはどうなってる？」レンは洞窟らしきところで目を覚ました。脇腹から鋭い痛みで顔を顰めながら考える。

（あのときの銀狼はどうした？それにこの脇腹を治癒した後…誰がやったんだ？丁寧に包帯まで。）

そうこう考えてるとき、ふいに足音が聞こえ大剣を構えようと手を伸ばすが、そこには大剣はない。周りを見ると少し離れたところに大剣が立てかけてある。取りに行こうとするが脇腹の怪我のせいで素早く動けず、振り返るとそこには人影が。

レンはその人影をじっと見つめ、どんな状況でも対応できるようかまえた。

「おまえは…ッ！！なんでここにいるんだ？」視線の先にはこの前助け、後をつけていた女性がいた。

「えっ…えーっと、たまたま通りかかったから？」女性は動揺しながら言う。

「こんなところにたまたま通りかかるわけないだろ。おまえなんだろ…銀狼。」女性は一瞬びくつと体を震わせレンをみる。

「おかしいと思ったんだよ。こんな雪山をひとりで行くなんてよ。レンは女性をみながらぼそつと呟く。

「おまつ！ついてきてたのか！！」女性は動揺かくせず一気にまくしたてる。

「うるさ…。」レンはぼそつといい、顔をしかめる。「だっておかしいだろ…街で血濡れの女性なんて。最初からなんかあると思ったださ。んであいつらはなんなんだ？」レンは包帯を解きながら聞く。

「なんでいわないといけない。お前には関係ない。」女性は瞳を鋭くし、レンを射抜く。

「別に言わないなら聞くんもりもねえー。包帯サンキュー。んじ

や。「レンは大剣を背負い外にでる。女性は何も言わず、見えなくなるまで見つめ続けた。

「とりあえず雪山の観察だな。全く…なんでこんなに魔物が活性化してんだよ。」そう呟き。雪山を見上げる。そして歩みはじめた。

「つかレンどこにいったんだよ。全然みつかんねーじゃん。」
「ほんとだよー！レンー！！どこー！！」「そんな叫んでも出てこないよ…。」

グレン一行はレンを探すが見つからず、街をさまよっていた。

「しゃーねー。ギルドでもいって情報収集でもすつか。レンの情報もあるかもしれねーし。」グレンが二人に話す。フィオはぶすつとしながらも頷き、アーシェはそれを見ながら苦笑していた。

「ここがギルドか。入るぞ。」中に入り、受付にいた女性に声をかけマスターを呼んでもらうようにした。「早くレンに会えないかなー」。フィオは椅子に座り、足をばたばたしながらつまらなさそうにしている。「すぐ見つかるよ。大丈夫。」アーシエはそんなフィオをみながら言う。その間にマスターがグレンと話している。その様子を見ていた。

しばらく待つとグレンとマスターが話し終わったのか、グレンがアーシェとフィオのもとへ来てアーシェ達に言った。「あいつ雪山に行ったかも……」。「ええええええー！！！」

そのころレンは雪山を偵察していた。

「原因はあの付近だな。」「レンは頂上を見つめる。」「それにしても」

も魔物が多すぎる。」「辺りには魔物がうろついている。

「行くしかない…か。」「レンは大剣を抜刀し、魔物の群れに飛び掛る。そして近くにいた魔物を軽く両断し、次の魔物を狙う。魔物達も気付いたのかレンに向かって襲い掛かってくる。レンは雪にも慣れたのか、以前よりも軽いステップで魔物に接近し叩き潰していく。

「くッ！魔法か！」「左から氷槍が襲い掛かる。何とか大剣で防ぎ、防ぎきれなかったものはかわしていく。

「敵が多いな…。あの力を使ってみるか。」「レンは黒い魔力を纏う。」「うおおおおおおお！」「その声と魔物に向かい大剣を振りぬく。その衝撃は漆黒の魔力を帯びながら魔物に襲い掛かる。魔物は漆黒の衝撃によりバラバラに切り裂かれた。

「これがこの力か…。」「レンはこの光景を見ながら呟く。

そのとき山頂から爆音が響く、レンは大剣を背負いなおし山頂に向かった。

「なに！この音！」「雪山に登り始めたフィオが言う。」「おいおい、もうレンの奴おっぱじめてるんじゃないだろうな！」「分からないわ、山頂に急ぎましょう！」「ただどなーこいつらをなんとかしなくちゃいけねーだろ！」「グレンは魔物を殴り飛ばしながら言う。ア―シエから放たれた矢は確実に魔物を捕らえ、次々と倒していく。

「数がこう多いと先に進めねーよ！しゃーねー解放する！フィオを連れて遠くへ！」「しょうがないわね！必ず戻ってくるのよ！暴走したら許さないからッ！」「ア―シエはフィオを連れて山頂に向

かい走る。それを妨害しようと魔物が立ちふさがるが、「お前らの相手は俺だつての。」グレンが魔物を殴り飛ばしアーシェ達の道を作る。その道を通りアーシェとフィオは山頂に向かった。

「さて…お前ら俺がなんで紅い悪魔と呼ばれてるか分かるかッ！」
燃えるような紅い瞳は瞳孔が開き、そして髪が黒から白へ。だが変わったのはグレンのみではなかった。周りの魔物も様子がおかしい。なにもされてないのに倒れてる魔物もいる。

「俺はな…周りに存在する全てから体力、魔力…生気を奪っちゃ
ういわば特異体質でな。本気で行かせてもらうぜ！」グレンは凄ま
じい勢いで魔物に接近し、殴り殺していく。

「カハハハハハハハハッツツ！！！！！！次はどいつだ！さつさと来いよおおお！！！！！！全員殴り殺して、かけらも残さず喰らい尽くしてやるよ！！！！！」グレンは豪快に笑いながら魔物達（餌）を見つめる。

少し時間が経つと血だらけのグレンが多数の魔物の屍の中にたっている。「楽勝。楽勝。さつさと山頂へ行くかな。」頬についた魔物の血を舐めとりながら呟いた。

（ちッ！ここまでなのか…）氷狼は息をきらしながら周りをみる。そこには魔物の大群。

「ここまでのようだな。氷狼の生き残り。」その声の主は魔物を従えている親玉であり、氷狼を襲った張本人。外見は人間と似ているが纏っているオーラが人ではないことを示している。

（こいつ…！！）氷狼は歯を噛み締める。

一族を滅ぼしたこいつ。大勢の魔物を従えいきなり現れた奴は里を襲い、容赦なく氷狼の長を殺し、里の民を殺し尽くした。たまたま里を離れていた自分はまぬがれたが、里は壊滅状態だった。

その相手がここにいるのに自分の力ではどうしようもない、力のない自分に狂いそうだった。

「…やれ。」魔物の主の声とともに辺りにいた魔物が氷狼に殺到する。

（もう…駄目なのか…。）氷狼は目をつぶる。

「フォースレイン！」どこからか力強い声とともに風切音の後、魔物の絶叫が聞こえた。氷狼は恐る恐る目を開ける。すると魔物の

群れは血を流し、どいつも瀕死の状態。

「なに諦めてんの!？」後方から女性の怒鳴り声が響く。その声の女性は茶髪を後ろで結わいているエルフだった。弓を片手にこちらに走ってきた。その隣には紅い髪の毛の少女がいた。

その少女はこちらに来るなり私を回復し始め、エルフの女性は魔物達の前に立ちふさがった。

そのころ山頂を目指すレンは一人で魔物達と戦闘の真っ最中だった。

「ちッ!」レンは漆黒の氷槍を無数に創造し魔物に撃ち出す。氷槍は魔物に吸い寄せられるかの様に刺さっていく。

「やっと終わったか。」レンはあたりを見渡し魔物がないのを確認し大剣を背負う。

山頂はついさっきより禍々しい雰囲気が強くなっている。

「おいレンじゃねーか!？」後方からグレンの声が聞こえ、後ろ

を確認する。そこにはやけに焦った顔のグレンの姿が。

「おう。なんでそんな焦ってるんだよ。」「レン！それどころじやねーよ！フィオとアーシェが先行っちまってよ！」「どこにだよ。」「山頂にきまつてるだろーが！」「…はあ？」いきなりの事で状況が把握できずにグレンを見る。

グレンから大まかな話を聞き、やっと事態が飲み込めたレンはグレンと山頂に急ぐ。「なんでそんなことになってんだよ！」「しよーがねーだろ！ここに到着したらお前いねーし、山頂に行ったら魔物がでてるしよ！」「ちッ！またかよ…。しつこいッ！」「目の前の魔物を斬り飛ばしグレンを見て言い放つ。

「ここは任せろ。すぐに追いつく。」「早くこいよ！先行くぞ。」「グレンは近くの魔物を殴り飛ばし、山頂に向かった。

「さつきから連戦過ぎるだろ…。」「漆黒のオーラを纏い大剣を構え、魔物の群れに突っ込む。魔物はレンに殺到し始める。

レンは手にした大剣で魔物を斬り倒しながら漆黒の雷を創造し魔物を打ち抜く。しかしレンの紅い瞳は目の前の敵を見ていなかった。遠くから魔物の群れがあり、その軍勢の動向を見ていた。

（あいつらこっちに来るな。とにかく目の前の奴らをはやく潰さないとな。）

「それにしても数が多すぎる！」「目の前の敵を斬り殺し、叩き潰し、漆黒の魔法も使用するが数が多すぎて魔物の群れが来るまでに間に合いそうもない。一旦どこかに隠れて機会を見たほうがいいかなーなど考え、距離をとろうとしたとき後方から漆黒の雨が降り注

ぐ。

その雨に塗れた魔物は急に苦しみだし、体が溶け出す。そして雨が止んだ時には魔物の群れは体全体が全て溶け見えなくなっていた。

そしてレンが後ろを振り返ると同時に体に衝撃が走り抜け、そのまま後方に倒れる。

「つつー…。なんなんだよ。」目の前には一人の女性の顔があった。

「レン様！ここにいたんですか！？」その声の主を見たレンはぼんやりと思った。どこかで見たような顔だなーと。

「どうしたエルフの娘。それで終わりか？」「いちいちうるさいわねー。」そういいながら魔法の矢を速射する。その矢は青年に当たる瞬間に消え失せる。

（さつきから当たる間に消え失せる。なにか魔法を消失する力が…？）アーシェは数秒思考するが、相手の攻撃が迫る。思考を素早く中断し、光球を避ける。

（こっちに考えさせないつもりね！）アーシェは青年を見つめ動向をさぐる。

その遙か後方には氷狼とフィオの姿。フィオは必死に氷狼に治癒を施している。氷狼も当初よりは傷跡もなくなり、回復しているみたいだった。氷狼は立ち上がりフィオに伝える。

「おい娘…。礼を言う。俺はこれからあいつを潰しに行く。離れてろ。」「え…。うっうん。」フィオは少し驚きつつも少しだけ氷狼の後ろに下がった。氷狼は素早く青年の背後に迫るとともに前足でなぎ払う。青年は見えてるかのようにあたる直前で手をかざし光の壁を創造する。前足は青年には届かなかった。

（もらった！）アーシェは魔法の矢を青年に向けて放つ。青年は近づく矢に気付いていない。（よし！あたれ！）その矢は青年の背中に突き刺さる。「いってー…。」青年は笑いながら振り向く。

「ッ！！」その笑顔を見た瞬間全身が震え、体が重くなる。氷狼は素早く後方に大きく距離をとる。

「じゃあ遊びはここまでって事で。本気でいかせてもらっわ。」青年は瞳を閉じて唱え始める。「我トライデントの名の下に神より授かれし第三の扉開かれたまえ。」そう唱えるとまばゆい光が青年を包み込む。

そして光が消えたとき、青年をみたアーシェは驚く。いや氷狼もフィオも同様に驚いていた。

青年の髪、瞳は黄金に輝き、背中からは純白の羽。そして青年は言う。「ジークウエル様の下僕：第三位トライデント。貴様らの死に場所はこちらだ。」

氷山の守り神―6―

「なんなのよ…こいつ。」アーシェはトライデントを見て唖然としてる。フィオもアーシェと同様。だが氷狼は違った。トライデントに氷のブレスを吐きつける。トライデントは純白の羽でブレスをいとも簡単にかき消し、氷狼に詰め寄り魔法で輝く拳で殴りとばす。氷狼はまともに拳を受け、凄い勢いで壁に叩きつけられた。

「大丈夫ッ！」フィオは氷狼に駆け寄り怪我の状況を確認した。出血は酷くないが、意識はなく気絶しているみたいだった。そのまますぐに氷狼の治癒を始める。

「フィオ大丈夫なの！」魔法の矢で牽制しながらフィオに言う。だがそのアーシェもフィオを見ている余裕がない。トライデントは目の前に光の壁を創造し、徐々にアーシェとの距離を詰めていた。

「アーシェ！」扉を勢いよく開け。グレンが入ってくる。アーシェに近づくトライデントを見て状況を察知したのか、トライデントに飛び掛る。その行動を察知していたのか、グレンの拳をかわしグレンの腹部に輝く拳を叩き込み短く「バースト。」と詠唱した。すると輝く拳が爆発し、グレンは吹き飛ぶ。なんとか体勢を立て直し着地するが、ダメージは大きいのか腹部を押さえうずくまる。

「グレン！」そういいながらアーシェが駆け寄ろうとするが、トライデントがそうさせない。魔法を纏い輝く足でアーシェを狙い襲

う。アーシェは体を捻り、かるうじてかわす。

「ちッ…。アーシェ！俺は大丈夫だ。気にするな。」グレンはアーシェにそう叫び伝える。（そうは言ったものの解放はアーシェとかの負担が…。どうする？）そう考えるうちにもアーシェにトライデントが迫っている。

「考えても始まらないか…。行くぜ！」グレンはアーシェとの間に入る。

「アーシェいつものやつで行くぞ。」そう短く伝えると。グレンはトライデントの側頭部に回し蹴りを繰り出す。トライデントはそれを光の壁を創造し防ぐ。それを見越したのかすぐに体を反転し裏拳を繰り出した。

「なにッ！」トライデントは若干焦りながら手でガードする。

「グレン引いて！」アーシェはグレンが時間を稼いでる間に魔力を練りこんでいた。その声に反応しグレンは後方に飛ぶ。

「フェアリーアロー！」力強い詠唱と共に圧縮された魔法の矢が放たれる。トライデントはとっさに光の壁を創造する。だがその矢は壁を突き抜けトライデントの右足を打ち抜く。

「グッ…！」トライデントは後方に羽ばたきながら距離をとり、治癒をしようとするがグレンがすでに真横に移動していた。「おらああああ！」気合の咆哮とともにグレンの拳がトライデントの顔を打ち抜いた。

（いけるのか？）ふとグレンがそう考えた刹那、グレンの背中から手が生える。「がはッ！」口からとめどなく血が溢れ出る。「俺を顔面を捉えた褒美だ。」そうそっけなくいいグレンを蹴り飛ばす。

「グッグレン…。嘘でしょ。グレーーーーーン!!!!!!」「黙れ

…。煩いぞ虫けら。」後ろから輝く拳を叩き付け「バースト。」爆発しグレンと同じ方向に吹き飛ぶ。

「ッ！！」フィオは口を手で押さえる。目の前の光景が信じられなかった。今まで一緒に旅してきた仲間が目の前で殺された。すぐに治癒しに行こうとするも目の前には奴がいる。なにもできない自分がかくやしかった。だがそんな事を考えているうちに奴の拳が迫る。

もう駄目だと思った。

そして最後に想った（レン！助けて…。）

「ッ！！」トライデントは攻撃を止め後方に跳ぶ。そこには漆黒の炎が踊り狂っていた。そこにいたら少なくとも相当のダメージを受けていただろう。そしてそこには見覚えのある顔があった。

「ククク…。ハーハハッハ！！これは面白い！面白すぎる！お前がいたのか！漆黒の王様がよおお！！！！」。「なに抜かしてやがる。意味わかんないことほざいてんじゃねーよ。イリア…あいつらを頼む。」「分かりました。」「イリアと呼ばれた金髪の美女はグレン達の方に行き状態を見る。」

（これは…ひどすぎますね。…あれ…この人達精霊の絆を！）すぐにアーシェに近寄り「あなたの主はまだ助かる！信じなさい！」そしてグレンに「あなたも信じなさい。精霊との未来を！」

（俺は死んだのか…。）グレンは一人暗闇の中に漂いながらある一人の女を想う。ただ一人、相棒であるアーシェのことを。（やべえ…眠くなってきた。く…。）

その時一筋の光が差し込む。（なんだこの光。）その光に向かって無意識に手を伸ばした。

（グ…ン…。）（この声は…。）光の先には生まれたままの姿のアーシェがいた。（一緒に行こうグレン。）（どこにだよ…。俺は死んだんだぞ。）（違う。まだ死んでないよ。あの人が言ってた。精霊の絆って名ばかりのものじゃないんだって。共に生き、共に進むため、そして戦うための絆。私はあなたといつまでも一緒よ。さあ行こう。わたしたちの帰るところへ。）アーシェの差し伸べる手をグレンは掴み、光の元へ飛び込んだ。

レンは大剣を杖に立っている状態。そして多少傷を負っているが余裕がみえる顔のトライデント。両者見れば戦局など明らかだろう。

「おいおいおいおい！なんだその無様な姿はよー！漆黒の王と呼ばれた男がこんななのかあ！？もつと楽しませてくれよおおおおお！！」「ちいッ！！」漆黒の炎を纏った大剣を振るう。

「バーストオオオオオ！！！！」漆黒の炎に拳をぶち当て爆発。

漆黒の炎は消えうせ目の前の獲物に襲い掛かる。「光の拳受けてみなあああああ！」レンはその拳を避けられないと悟ったのか大剣を相手に向かって走らせる。「カハッ！！！！」「ちい！！！！！！」両者はじけとぶ。凄まじい音を撒き散らし両者壁に衝突する。

「捨て身の剣ねえー…。おもしれー事してくれんじゃんよ！」瓦礫を吹き飛ばし。レンに向かって言い放つ。レンも瓦礫を吹き飛ばし奴を見据える。

「おっと。」トライデントは手をかざし光の壁を創造させる。その壁に黒い氷柱が衝突する。

「おつかねえー女だな…。」「今貴様をなぶり殺したいのは山々だがレン様の治癒が先だ。」「おいおいじゃあ誰が俺の相手をしてくれんだよー？…あッ？」ふと殺したはずのグレン達の方角を見る。

「敵とあだ名す者の生を喰らい吸い尽くす死神。」倒れているグレンが呟く。

「あなたを包みこむ聖なる矢。」アーシエもグレンに続いて呟く。

「起現…深森の紅死神！！！！！！」二人の呟く祝詞。そして二人は光に包まれた。

氷山の守り神――7――

「はーはっはっは！……おもしれーおもしろすぎるぜ！おまえら！」「トライデントは光が収まったところを見る。そこにはエルフの特徴的な耳、風貌はグレン、だが髪はグレンの黒ではなく、アーシエの茶色が混じっている。そして周りを漂っている光の矢。これはアーシエが魔力で創造する矢だ。

グレンはゆっくり立ち上がり「さっきはよくもやってくれたな……。その借りはまとめて返してやるよよよ！……」「！？」爆発したようにグレンのいた地面は陥没し、一気に距離を詰めその拳を振り下ろした。その拳は見えない壁をぶち破り、トライデントの腹部を捉えた。そしてトライデントはその衝撃により吹き飛ぶ。

だがグレンの攻撃は終わらない。グレンの周りを漂っている光速の光の矢を放つ。

「舐めるなアアアアア！……！」光の拳で迎え討とうとするもなぜか力が入らない。（なぜだッ！？なぜ！？）これを受けたらまず

い。そう感じ体を無理矢理動かすもすでに遅かった。全てを避けることはできず、トライデントに矢が殺到する。

「ぐッ!？」全身に矢を受けたトライデントはなんとか踏ん張り耐えている。「あの世へいきなァッ!」矢は次々とトライデントに襲いかかる。いくら虚脱感は軽くなったが、どうやら腹部からきていることに気付く。(そういえばあの拳を受けた時に…)「エエエエエエ!!!」その顔に堪えきれない憤怒を宿しながらかわす。かわす。かわしまくる。

「も…もうだめ。」フィオは自分の魔力を使い切ったのかその場に座り込む。氷狼は傷もふさがり回復したのかゆつくりと立ち上がる。

「もう大丈夫なの?どこか痛いところない?」「ああ…。二回も助けられたな。ありがとう。」「えッ…。どういたしまして。」「フィオは疲労の色がにじみ出ている顔から一瞬驚きの表情を浮かべ答え

る。

こんな感じのしゃべり方だったっけ！？などと考えていたフィオは、ふと氷狼を見ると、真剣な眼差しでトライデントを見ていた。

そしてゆっくりとトライデントに向かい歩く。それを見ていたフィオは慌てて「もう駄目だよ！あの強さ見たでしょ！！グレン達に任せて休みなよッ！」と言い放ち、氷狼の前に立ちはだかる。

「知ってるさ…。だが引いてはいけないときもあるんだ。一族を皆殺しにされて黙ってられん。」フィオの瞳をまっすぐみながら力強く言い、フィオの横を通り過ぎる。フィオには止められなかった。あの力強い瞳、そして言葉を聞いてしまったのは…。

いくらか冷静さを取り戻したのかトライデントは考える。（しかし精霊の絆をこんなところで揉めるなんてなッ！正統がこんなんだとはな…。まあ強いっちゃ強いが…。）目の前の敵を見て、しっかりとその顔を脳に刻み込む。そして凄まじい形相で睨み（次あったときは必ず潰し殺してやるッ！！！！！！）

そして矢をかわし終えた時、その憤怒を発露させる。「うっとー

しーんだよ！クソヤローが！！」トライデントの周囲に数え切れないほどの光球が創造される。「全員吹き飛びな！！」その光球がトライデントの叫びにより四方八方に飛来する。

グレンは光球に向かって矢を放ち相殺させる。イリアは魔法で壁を創造し防ぐ。回復を終えているレンはふと後方にいるフィオを見る。フィオはいきなり放たれた光球を防ぐすべもなく右往左往していた。

「ちッ！？」レンは走る。「レン様！？」途中、イリアの声が聞こえたが構っている暇などない。飛来してくる光球を斬り捌きながらフィオにたどり着く。

「レンッ！」助けに来てくれたレンを満面の笑みで答える。「じつとしてろよ！」レンはこちらに飛来する光球を退けながら、ふと氷狼の姿がない事に気付いた。ゆつくりと気配を探っているとトライデントの近くで見つけた。トライデントの背後をとる氷狼。だがトライデントがニヤリと笑っていた。その瞬間悪寒がはしり、いつでも魔法を行使できるよう漆黒のオーラを纏わせる。

（その首とつたあ！！）氷狼はトライデントの首を刈り取ろうと氷爪をはしらせる。そして首をあっさり跳ね飛ばす。

（なにッ！！）だが残念ながらトライデントの影は実体ではなか

った。氷爪が切り裂いた瞬間、陽炎のように消えた。

（どこにいるッ！！）気配を探るがその前に光の槍が氷狼の背後に迫る。氷狼は光の槍に全く気付かない。だがその槍は氷狼には届くことはなかった。その前には漆黒の氷壁がそびえ立っていた。

トライデントはレンに一瞬視線を向ける。レンは右手をトライデントにかざしながら魔法を行使している。（ここへきて漆黒の王が邪魔するのかよッ！全くどいつもこいつもイライラさせる！！もう魔力も残り少ないし…。結局氷狼一匹殺しそこねた。）そして自らの光の魔力に包まれながら消えていった。

その間にも光球はあちらこちらに衝突し、暴れまわり、雪が舞い散り視界を遮る。その蹂躪が終わり辺りも見れるようになったが、トライデントは見当たらずもう逃げた後だった。

「ちッ！？逃げられたのか…。」グレンは忌々しげに呟き、精霊との盟約（祝詞）を解く。グレンの周りが輝き、それが収まると苦しそうに蹲ってる二人の姿。「おいおい大丈夫かよ…。」レンはグレンとアーシェに問いかける。「あーきつッ！」「もう動けない…。」二人とも大の字に寝転びながら答えた。

みんなが疲弊しきっている中、氷狼はレン達に向かい歩を進める。
「レン…といったな。助けられたありがとう。」

「あー。気にすんな。んでこれからどーすんだよお前。」寝転ん

だ状態から姿勢を正しながら問う。その返答をかえす前に、眩い光に包まれ、収まると人型になっていた。

その姿はレンが見たあの姿だった。褐色の肌、少しつり目がちな大きな瞳、スレンダーな姿、純白の髪は軽くウェーブしている。

「えええええー！！人になれんの！！」「…少し煩いぞフィオ。」
フィオが驚き、女性を指差すが、それをレンが苦笑いのまま注意する。

「ああ…。フィオ、治癒ありがとう。それとレン、俺はシェリルって名前がある。そっちで呼んでくれ。」ハスキーな声でフィオに礼を、レンには名前を言う。

そして少し間を空けてからレンの質問に弱弱しく答える。「一族はあのトライデントとかいう奴に殺された。ここであいつを殺して一族の仇をとるつもりだったが、この様だ…。俺はこれからどうすれば…。」俯き、涙を見せぬよう、悲しみにたえるよう拳を握り締めていた。その姿からスノーウエルの守護者と誰が思っただろうか。静寂があたりを漂う。

シェリルは俯いていたが誰かが近づく気配を感じ取った。その影から手が差し伸べられる。

「じゃあ俺らと来るか。」声の主を見ようと恐る恐る顔を上げると、そこには優しく包み込むような笑顔のレンの姿が。

唇を噛み締め、今にも泣きそうな顔のシェリル。一筋の涙を流し、

シェリルはレンの手を握り返す。

レンはその手を引き寄せゆつくりと、優しくシェリルを抱き寄せ
「無理するな…。」その言葉はいともたやすくシェリルの涙のダム
を決壊させた。

そこには皆の笑顔とシェリルの泣き声でいっぱいだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4819j/>

漆黒の旅人

2011年11月16日13時09分発行